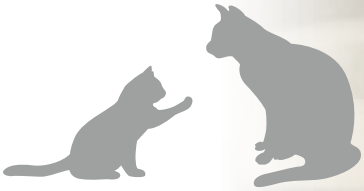


平成30年度 新宿区

夏目漱石 コンクール作品集

読書感想文コンクール（中学生の部・高校生の部）

「わたしの漱石、わたしの一行」

絵画コンクール（小学生低学年の部・小学生高学年の部）

「どんな夢を見た？あなたの「夢十夜」」

平成30年12月

新宿区 SHINJUKU CITY

あいさつ

新宿区長　吉住　健一

平成30年度新宿区夏目漱石コンクールに応募していただいた全国の小学生・中学生・高校生の皆さん、ありがとうございました。また、入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

次世代を担う子どもたちが夏目漱石を知り、その作品に触れる機会を創出するとともに、「新宿区立漱石山房記念館」の整備事業を盛り上げていくために開始した本コンクールも、今回で5回目を迎えました。

読書感想文コンクール「わたしの漱石、わたしの一行」には全国の中学生・高校生あわせて2、429点の応募がありました。また、絵画コンクール「どんな夢を見た?あなたの「夢十夜」」には、全国の小学生から876点の応募がありました。どの作品も一人ひとりの着眼点が光る力作揃いで、漱石山房記念館開館1周年である本年、このように数多くの素晴らしい作品をご応募いただけたことに、感謝申し上げます。

漱石山房記念館には、美しい装幀の初版本や漱石山房の再現が見られる展示室、漱石作品や関連図書を手に取ることができる図書室やブックカフェがあります。ぜひ漱石山房記念館にご来館いただき、漱石の世界に触れてみてください。皆さんの豊かな感性、表現力を磨いていく一助になれば嬉しく思います。

末筆になりますが、本コンクール実施にあたり、後援していただいた漱石ゆかりの地の地方自治体、企業、大学、愛好団体等の皆様を始め、審査していただきました皆様、保護者の皆様、ご指導くださった先生方、その他ご協力いただきました多くの皆様に心より御礼申し上げます。

―もくじ―

■新宿区長あいさつ……1
■新宿区立漱石山房記念館……4
■コンクール概要……5
■審査委員紹介……6
■応募状況……6
■審査講評……7

読書感想文コンクール「わたしの漱石、わたしの一行」……15

〈中学生の部〉

・**最優秀賞**
豊島岡女子学園中学校　2年　富澤　雫……17

・**優秀賞**
大阪教育大学附属平野中学校　2年　北村　眞珠……18

・**朝日新聞社賞**
新宿区立西新宿中学校　3年　茂田　さんご……20

・**紀伊國屋書店賞**
成城中学校　2年　志田　丞……21

・**新潮社賞**
日本女子大学附属中学校　1年　渡辺　佳奈……23

・**早稲田大学賞**
日本女子大学附属中学校　1年　佐藤　花音……24

・**佳作**
新宿区立牛込第三中学校　3年　勝部　真衣……26
学習院女子中等科　1年　瀬戸口　真衣……27
学習院女子中等科　3年　打田　梨華……29
学習院女子中等科　3年　吉田　弥生……30
成城中学校　2年　小田川　陽知……31
跡見学園中学校　3年　中山　桜……33
大妻中学校　1年　遠藤　ゆくり……34
大妻中学校　1年　篠原　愛……35
豊島岡女子学園中学校　2年　吉野　姫菜……36
熊本市立北部中学校　1年　田尻　茉優子……38

〈高校生の部〉

・**最優秀賞**
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年　八木　乃莉子……39

・**優秀賞**
早稲田大学高等学院　3年　馬場　俊……40

・**朝日新聞社賞**
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年　林　奈々穂……42

・**紀伊國屋書店賞**
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年　大内　郁乃……43

・**新潮社賞**
富士見高等学校　2年　山下　珠央……45

・**早稲田大学賞**
長野清泉女学院高等学校　2年　海沼　知里……46

・**佳作**
東京都立日比谷高等学校　2年　井上　美穂……48
大妻高等学校　2年　後藤　萌那……49
共立女子高等学校　2年　辻ヶ堂　清香……51
暁星高等学校　2年　佐宗　隆太……52
東洋女子高等学校　3年　山口　叶……53
水城高等学校　1年　関根　康太……54
長野清泉女学院高等学校　2年　笹辺　有紗……56
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年　松浦　光希……57
福岡雙葉高等学校　2年　越智　友梨佳……58
福岡県立小倉高等学校　2年　成友　快……60

絵画コンクール
「どんな夢を見た？あなたの「夢十夜」」

……67

〈小学生低学年の部〉

・最優秀賞
新宿区立早稲田小学校　2年　山本　惟織……68

・優秀賞
新宿区立大久保小学校　2年　滝沢　太郎……69

・朝日新聞社賞
東京学芸大学附属世田谷小学校　2年　立澤　樹……70

・紀伊國屋書店賞
荒川区立峡田小学校　2年　森　美彩紀……71

・新潮社賞
新宿区立四谷小学校　3年　山口　晴……72

・早稲田大学賞
熊本市立古町小学校　2年　太田黒　美空……73

・佳作
新宿区立落合第一小学校　2年　安藤　虎之介……74
新宿区立淀橋第四小学校　2年　加藤　工朔……74
新宿区立淀橋第四小学校　2年　松本　賢大……75
新宿区立西新宿小学校　1年　加賀　春衣……75
暁星小学校　1年　土屋　昌輝……76
筑波大学附属小学校　3年　首藤　琉花……76
日本女子大学附属豊明小学校　1年　二上　栞……77
桐朋小学校　2年　譲原　大悟……77
川崎市立栗木台小学校　3年　佐々木　信一良……78
安芸太田町立戸河内小学校　1年　新宅　陽樹……78
松山市立生石小学校　2年　越智　悠斗……79
松山市立北久米小学校　3年　山本　彩瑛……79
高松市立太田小学校　2年　下田　himea……80
熊本市立古町小学校　1年　村元　明莉……80

〈小学生高学年の部〉

・最優秀賞
新宿区立落合第四小学校　6年　村尾　伊織……82

・優秀賞
新宿区立戸塚第三小学校　4年　岡田　雄斗……83

・朝日新聞社賞
新宿区立西新宿小学校　4年　内山　神衣……84

・紀伊國屋書店賞
玉名市立横島小学校　5年　水島　悠月……85

・新潮社賞
新宿区立早稲田小学校　4年　大澤　英恵……86

・早稲田大学賞
新宿区立四谷第六小学校　5年　岩﨑　寛和……87

・佳作
新宿区立早稲田小学校　5年　山本　晴貴……88
新宿区立鶴巻小学校　5年　江波　詩織……88
新宿区立戸塚第二小学校　4年　二口　達成……89
新宿区立戸塚第二小学校　4年　八田　璃海……89
新宿区立戸塚第三小学校　4年　岩崎　曜……90
新宿区立戸塚第三小学校　4年　桐谷　翠音……90
新宿区立西新宿小学校　4年　大上　晄……91
新宿区立西新宿小学校　5年　髙木　幸眞……91
新宿区立西戸山小学校　4年　大川　春樹……92
豊島区立南池袋小学校　5年　竹本　麗……92
安芸太田町立戸河内小学校　6年　多賀　心優……93
安芸太田町立上殿小学校　6年　影井　永遠……93
苓北町立富岡小学校　4年　福島　詩……94
多良木町立黒肥地小学校　6年　岡村　帆斗……94

新宿区立漱石山房記念館

文豪・夏目漱石は、新宿で生まれ育ち、晩年の 9 年間を「漱石山房」と呼ばれた早稲田南町の家で暮らしました。『三四郎』『こころ』『道草』など数々の代表作が執筆され、「木曜会」と呼ばれる文学サロンが開かれた漱石山房。

平成 29 年 9 月 24 日、新宿区はこの跡地に、漱石にとって初の本格的記念館「新宿区立漱石山房記念館」を開館しました。

この記念館では、資料の収集・保管を行うとともに、漱石やその文学世界について発信します。図書室やブックカフェでは、漱石の作品や関連図書に触れることができます。

漱石を、文学を愛する皆さまが集い、学び、大切な「土地の記憶」を未来に継承していく記念館で、ゆったりとした時間をお過ごしください。

施設の概要

●開館時間　午前 10 時～午後 6 時（入館は午後 5 時 30 分まで）
●休 館 日　月曜日（休日の時は次の休日でない日）
　　年末年始（12 月 29 日～ 1 月 3 日）
●観 覧 料　一般 300 円、小中学生 100 円
（通常展）　※ 団体（20 人以上）は個人の観覧料の半額
●所 在 地　新宿区早稲田南町 7 番地
●問合せ先　☎ 03-3205-0209　FAX 03-3205-0211
●アクセス　東西線早稲田駅より徒歩 10 分、神楽坂駅より徒歩 15 分
　　有楽町線江戸川橋駅より徒歩 20 分
　　都営大江戸線牛込柳町駅より徒歩 15 分
　　都営バス（白 61）牛込保健センター前より徒歩 2 分

漱石山房記念館

コンクール概要

①読書感想文コンクール

「わたしの漱石、わたしの一行」【中学生の部・高校生の部】

夏目漱石の作品（作品の指定なし）を読み、自分の心に深く残った「一行」を選び、なぜその一行を選んだのかを1、000～1、200文字（400字詰め原稿用紙2枚半～3枚程度）で表現していただきました。

「一行」は文章のひとくだりとし、一文に限りません。また必ずしも一行に収まらなくても良いこととします。また、本文の一人称はコンクール名称の「わたし」に限定しません。日本語で書かれ、未発表で筆者自身のオリジナル作品に限ります。

②絵画コンクール

「どんな夢を見た?あなたの「夢十夜」」

【小学生低学年の部（1・2・3年生）・高学年の部（4・5・6年生）】

将来の夢ではなく、自分が「こんな夢をみた」又は「こんな夢をみたい」をテーマに、想いをめぐらせ自由な発想で描いていただきました。夏目漱石作品を読んでいなくても良いこととしました。

八つ切りサイズ（27cm×38cm・縦横自由）の画用紙に画材は、鉛筆、色鉛筆、クレヨン、絵の具、マジック、サインペンなど自由。立体的でない貼り絵、切り絵、版画も可。デジタル作品は対象外。

作品募集チラシ（絵画）

作品募集チラシ（読書感想文）

審査委員紹介

	読書感想文コンクール	絵画コンクール
審査委員長	森　まゆみ（作家）	
審査委員	中島　国彦 （早稲田大学 名誉教授）	藪野　健 （府中市美術館館長 日本藝術院会員）
	久保庭　健吉 （日本国語教育学会 常任理事）	南口　清二 （一般社団法人 二紀会理事）
	吉住　健一（新宿区長）	
	酒井　敏男（新宿区教育長）	

後援企業・大学賞選考	株式会社朝日新聞社 文化くらし報道部長　山口　進	
	株式会社紀伊國屋書店 取締役　西根　徹	
	株式会社新潮社 宣伝部次長　馬宮　守人	
	早稲田大学 文化推進部長　十重田　裕一	早稲田大学 文化推進部副部長　石見　清裕

（順不同・敬称略）

※肩書きは審査時のものとなります

読書感想文コンクール一次審査にご協力いただきました。

飯田和明　宇佐見尚子　岡田幸一
小尾　眞　甲野恵美　佐藤希世子
福本元恵　森　顕子　山下憲人
山本廣勝

（あいうえお順・敬称略）

応募状況

●読書感想文コンクール

中学生の部 1,440 点、高校生の部 989 点、計 2,429 点

●絵画コンクール

小学生低学年（1・2・3 年生）の部 594 点、

高学年（4・5・6 年生）の部 282 点、計 876 点

審査講評

審査委員長
作家　森　まゆみ

今年は明治維新１５０年ということでたくさんのイベントが行われていますが、維新がもたらしたものは文明開化、殖産興業だけではありません。江戸の名主の末裔である夏目漱石にとっては「維新」ではなく「瓦解」でもありました。そして追いつけ追い越せの近代化の中で、そのスピードに適応できない多くの煩悶青年も生み出しました。今回も「こころ」「門」「坊っちゃん」などにたくさんの高校生・中学生が反応しています。この煩悶は今も続いているかもしれないのです。

今年の作文は大変、レベルの高いものでした。選ぶのに苦労しました。漱石礼賛でなく、明治の男性である漱石の女性観、妻への態度を批判的に捉えたものもありましたし、珍しい作品を取り上げたもの、ドストエフスキーなど他の本も咀嚼して書いているものもありました。ユニークな視点、自分の頭で考えた主張を選びました。小学生の絵のコンクールも同様、「こんな絵は僕には描けないよね」「このままでポスターに使えるね」とその大胆な構図や色使いに、審査員からため息が漏れました。関係各位のご尽力に感謝します。

読書感想文審査委員
早稲田大学名誉教授
中　島　国　彦

作品との出会いは、あとで思い返すと、「どうしてこの作品を終わりまで読んでみたいと考えたのだろう」という思いに支えられています。作品の中の一行となると、なおさらでしょう。活字の羅列の中から、おのずと浮かび上がって来るものが見えてきた時、誰もが幸福な思いを感じるのです。そうした体験を、中学生や高校生の時に持てたかどうかは、その人の、のちの言葉を媒介にした「精神の豊かさ」「生活の質」を決定します。

自身の体験と重ねて一節を読み込むのも、もちろん大切です。中学生にそうした書き方が目立つのは、おとなになるための一つのステップだからだと思います。高校生になると、自分の読書体験を冷静に意味づける言葉の作業が顕著になります。ていねいな文字で原稿用紙を埋めることも、自分の発見した思いをしっかりとつなぎとめる「言葉への誠実さ」の現われです。そうした現場を作文審査を通して拝見出来て、大変うれしく思います。

読書感想文審査委員
日本国語教育学会常任理事
久保庭　健吉

一、二次審査を通して中一作品と中二・三作品の間には、読解、

鑑賞、文章表現面で発達差があるのは否めません。その点、人物相互の関係を的確に捉え、主人公の人物像を平易なことばで自分なりに洞察している点を評価・入賞とした作品は、今後の審査基準の一つの目安になるかと考えます。

漱石コンクールも五年目を迎え、高校生の応募作品にも目を惹く新たな流れが伺えます。漱石文学の特色や価値観の違いを分析・批評したり、主人公の心情に正対すると共に、その姿を自分のことばで表現したりしようとする作品の数々です。読解・鑑賞から表現行動へと歩を移す背景に読み手の意欲が伺えます。

中学、高校共通な傾向は、学校毎の応募が見受けられるようになったことです。国語学室の教師が、生徒等と共にコンクールの趣旨を受け止め始めている姿と見たい。

絵画審査委員
府中市美術館館長・日本芸術院会員
藪　野　　健

夏目漱石の『夢十夜』がきっかけとなって、小学生が実に伸びやかに発想し、表現しています。時に深くもあります。高学年では都市生活の中で人々の中にいる私を夢の中で見つけたり、ゴジラが去った後の壊れた街、漱石本人と会ったり、またデカルコマニーで心象の色彩を用いて丘の上の虎を描いたり、バラエティに富んでいます。

低学年ではクラゲになった自分の透明さ、戦国武将になったぼくの痛快さ、5つのあくまのめに見つめられ怯え戸惑う姿がダイナミックに捉えられています。花火のテーマでは夜空に一瞬輝く鳥や花や魚がリリカルに描かれています。作品を見ながら、ふと子供たちの将来の明るさを思いました。

絵画審査委員
一般社団法人二紀会理事
南　口　清　二

確かに見たのだ
しかし肉眼ではない
身体のどこかで感じたのだ
他の人には見えない「何か」を『画』にしたのだ
他の人に見えるようにしたのだ
それも計画的な手順で
考え抜かれたように描いている
すごいことなのだ
大切にしたい
二度と会えないかもしれない
今だからこそ見えた夢と画を

審査委員

新宿区長　吉　住　健　一

夏目漱石コンクールにご応募いただいた小中高生の皆様、また審査委員を務めていただいた皆様に感謝申し上げます。

読書感想文では、中学生は、非常に珍しい作品の応募もありました。高校生は、文章が洗練されレベルの高い作品が多くありましたが、対象となる作品が集中する傾向がみられました。受験も控えているのでやむを得ないかと感じています。

見た夢、見たい夢を描いていただいた絵画では、夢で見たことをそのまま描きだした様な非常にインパクトのある絵が多く寄せられました。大人の発想では描くことができない子供ならではの夢のある絵を、楽しく拝見しました。

近代化する日本を眺めていた視点が窺える漱石の作品が、様々な形で受け継がれていくことを願っています。

審査委員

新宿区教育委員会教育長　酒　井　敏　男

本年も全国から多くのご応募をいただき、心より感謝しております。

読書感想文部門では、なるほどと思わせられるような文章、「わたしの一行」という課題に素直に応えている文章など、自分なりに一行に向き合った様々な文章に出会うことができました。同じ一行からでも、人によって違う捉え方があり、そこから考えることの幅の広さに、漱石作品が持つ深みを改めて感じる機会となりました。

絵画部門では、子供の夢の大きさを感じる絵が数多く寄せられました。見た夢見たい夢を画用紙に目一杯描いた作品から応募者の皆様の夢の世界を興味深く覗かせていただきました。この大きな夢を見る力を持ち続けて欲しいと感じました。

朝日新聞社賞選考

㈱朝日新聞社　文化くらし報道部長　山　口　進

感想文、絵画とも大変楽しく拝読、拝見しました。

感想文では、漱石の文章の中から、心に残る1行を見つけ出していただきました。今年は、著名な作品から選んだものが比較的多かったようですが、若い感性が新しい光を当てた跡を拝読して、また読み直してみたくなりました。

絵画コンクールも甲乙つけがたい作品がそろい、みなさんの色彩センスの豊かさには感心しました。

紀伊國屋書店賞選考

㈱紀伊國屋書店　取締役

西　根　　徹

絵画コンクール部門、多様な夢を多様な手法で描いた作品にたくさん触れることができ、審査自体がとても楽しい時間でした。特に、強烈なインパクトで目に飛び込んできた高学年の部の最優秀賞・村尾さんの作品が印象的でした。低学年・高学年とも、弊社の賞を絵本の1ページのような素敵な作品に授与できたのは、本屋としてとても嬉しいことです。

読書感想文部門、漱石作品を丁寧に読み込み、自分の有りように引き寄せながら生き方を発見するヒントにしたり、ユニークな視点で作品を分析したりする力作が、多数ありました。瑞々しい感性を持つ中高生の皆さんがしっかり本を読んでくれていることを実感し、大変勇気付けられました。

新潮社賞選考

㈱新潮社　宣伝部次長

馬　宮　守　人

感想文コンクールでは、『坊っちゃん』や『こころ』のような定番作品から一行を選びながらも、坊っちゃんの「人格形成」の過程について思いを馳せたり、象徴性の高い「植物」に注目したりと、従来とは違ったアプローチで漱石文学を読もうとした応募作もあって、興味深く拝読しました。

昨年から、「夢」がテーマとなった絵画コンクールには、前回以上に多種多彩な応募作が集まりました。小学生とは思えない完成度の作品に瞠目する一方で、脳裡の不定形のイメージを直にぶちまけたような力強い絵に、ハッとさせられることも。子どもたちの想像と創造の「潜在力」には、本当に驚かされます。

早稲田大学賞選考

早稲田大学　文化推進部長

十重田　裕一

中学生の部は、総じてユニークで尖った作品に魅力を感じました。例えば明治の地理感覚の視点から「坊っちゃん」に注目して登場人物のセリフを分析している点がユニークでした。あるいは「変な音」という作品に注目して、そこに内包される生と死の意味を分析的に読み取る文章など、切り口の面白いものが際立ったと思います。

高校生の部は、小説に自分の感覚や感情をうまく重ねながら論理的に書かれているものに魅力を感じました。例えば「こころ」の奥さんの静かな強さに注目してそこに自分を重ねるようにダイナミックに書いている作品や、「それから」の心臓の鼓動に注目し、自分の身体感覚に重ね合わせながら書いた作品、あるいは、「夢十夜」の第一夜に登場する女性の転生を百合の官能性と重ねて分析していく作品など、優れたものが多数ありました。漱石の小説に触れなが

ら自分の感覚や感情をそこに重ねてダイナミックに書かれたものが光ったように見えます。

早稲田大学賞選考
早稲田大学　文化推進部副部長
石見清裕

「変わった絵だな」と思って、ついつい目をうばわれます。よく見ると、構図といい、色使いといい、いよいよもって「変わった絵」です。ところが、さらによく見ていると、だんだん非常に優れた作品に見えてきます。よい絵は、こういう力を持っています。選ばれた絵は、いずれもそういう作品でした。

どうすれば、このような不思議なアイデアが浮かぶのでしょうか。子供の感性って、本当にすばらしい。この感性を失わないでほしいと思います。

読書感想文コンクール一次審査講評

飯田和明

すなおに自分の目で作品を読み、「一行」から作品と自身を語る文章に出会えたことを、うれしく思っています。

宇佐見尚子

一行から導き出された思いや考えが率直に述べられている文章が多かった。新しい作品との出会いが自分への気付きとなることを改めて実感した。

岡田幸一

中学生は、「坊っちゃん」などの作品に触れ、登場人物の生き生きとした姿に感興を覚えたことが、自己の生活経験に照らして書き綴っています。もう一度「坊っちゃん」を読んでみたくなりました。高校生は「こころ」や「夢十夜」といった作品をめぐり、驚くような独自の解釈を試みている作が多く、読んでいて、嬉しくなりました。若い人がこんなにも意欲的に漱石作品に取り組んでくれていることに、心強い思いとなりました。

小尾眞

感想文には「あらすじ」と「感想」、「まとめ」が必要ですが、この三者のバランスが重要です。「あらすじ」が長すぎるのも困りますが、「感想」の中に自己の体験を書きすぎるのもよくありません。一番力が入るのが「まとめ」だと思いますが、「まとめ」で成功するためには「展開」が重要です。よい「展開」を得るには、日頃の読書体験が大切です。（文学作品を読んだ後に必ず自分の中で、自分なりの感想をもつことです。この積み重ねがよい感想文を生むと思います。）

甲野恵美

難しい漢字、時代背景や言葉遣いに悪戦苦闘しながら次第に漱石文学の面白さや魅力に目覚めていく様子がよく分かる。入学して4～5カ月の一年生と二年生の差、4～5年学習を積んできた高校生の差はとても大きい。審査する立場からすると面白味に欠けるが、学年全体で同じ作品を読み感想文を書くことから始めるのも良い方法なのかと思う。

佐藤希世子

自分が選んだ一行に対し、選んだ理由、自分の体験など、読む人にとってわかりやすく、伝わりやすい作文が昨年より多くなったと思いました。その中で印象に残る作文、きらりと光る作文は、選んだ理由、体験で終わるのではなく、最後にもう一度一行を、作品を自分なりにとらえ直している作文でした。

福本元惠

皆さんの作品を読ませていただいて、大きな驚きと喜びの感動を数多く味わいました。応募作品はほんとうに力作揃いでした。書き手の深い意図のもとによく練られた語句や表現に読み手の琴線が触れると、そこから鮮やかな情景や心情が浮かびあがり、読み手の視野や考えが、広がり深まっていきます。読書は、文字言語を用いた書き手と読み手の対話活動です。優れた作品や表現との出会いは、人生の宝物、一生の財産となりますね。

コンクールへの応募を通して、文豪と向き合い、対話を重ねた経験は、これからの皆さんの人生に大きく役立つことと思います。深め広げた思いや考えを、どのように読み手の心に届けるか、入賞した仲間の作品を参考に、これからも表現力、対話力を磨き鍛える機会を大いに活用してください。今後の皆さんのご活躍を楽しみにしています。

森顕子

高校生の作品は多様な感受性と複雑な思考が文章化されていて、読みごたえがありました。作品としては「こころ」「夢十夜」が多く選ばれていました。わずかに作品世界に触れてその後すぐ自己の体験を語って作品に戻らない例がみられて残念でした。しかし、ますます深まりそうな惜しい文章も多かったので、次回に期待されます。

山下憲人

中学生・高校生作品の審査を通じての感想を記します。昨年度と同様に、等身大の自分を作品世界や登場人物に重ねながら、思索を深めていくという筆致が多く見られました。漱石が提示しようとした世界観を、若い皆さんが真摯に純粋に受けとめ、さらには新しい認識や価値観を紡いでいく姿に心強いものを感じます。

自らの思索を深めていくなかにおいても、「確かな読み」ということを大切にしていただければと感じます。漱石が私たちに問いかけてくるものを確かに受容しつつ、その確かさに支えられて生まれてくる認識や価値観こそが、皆さんのこれからを形作っていくと考えます。漱石作品から生まれる思索を記す、あるいはその軌跡を読み直してみることで、皆さんの「輪郭」が紡がれることを期待したいと思います。

貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

山本廣勝

応募作品に『坊っちゃん』、『こころ』、『夢十夜』が多数あるのは、授業で扱うからでしょう。そのため、授業内容の延長上で感想を書いているものが散見されました。しかし、作品を疑問や共感を持ちながら読むことが、豊かな読みにつながります。自分の経験と重ね

たり、表現を分析したりすることで、深い読みをした人も見られました。夏目漱石の人生や作品観、表現技巧にも注目した人も見られました。これから多くの作品を読む中で、この経験を生かし人生を豊かにしてくれることを期待しています。

読書感想文コンクール

わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部

最優秀賞 …… 17
優秀賞 …… 18
朝日新聞社賞 …… 20
紀伊國屋書店賞 …… 21
新潮社賞 …… 23
早稲田大学賞 …… 24
佳作 …… 26

高校生の部

最優秀賞 …… 39
優秀賞 …… 40
朝日新聞社賞 …… 42
紀伊國屋書店賞 …… 43
新潮社賞 …… 45
早稲田大学賞 …… 46
佳作 …… 48

《中学生の部》

最優秀賞

静かな基調低音

豊島岡女子学園中学校　2年
富澤　雫

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　だから清の墓は小日向の養源寺にある。

「だから清の墓は小日向の養源寺にある。」

『坊っちゃん』をしめくくる最後の文です。

気っぷのいい言葉で疾走してきた物語の終わりに、無造作に置かれたこの一文が、静かな余韻をいつまでも私のなかに残します。

坊っちゃんは嘘が嫌いです。企みも打算も坊っちゃんにはありません。いつでも本音で、本音過ぎて人から理解されにくく、生きづらいことも多そうですが、自分がそんなふうであるということにさえ頓着していません。

私は眩しいものを見るように、その姿を追いかけます。はらはらしながら目が離せません。私だったら、〝月給が上がるなら大人しくもらっておくほうが得だ〟という、下宿屋のお婆さんの忠告にうなずいてしまいますし、〝君が来てから生徒の成績が上がった〟などと誉められたら、簡単に喜んでしまうからです。中味のないお決まりの教訓に、〝あなたの仰る通りにはできません、この辞令は返します〟と、たとえ言ってみたくても、きっと、絶対に言えないからです。

坊っちゃんのようであることを、今だったら、空気が読めない、とでも言うでしょうか。

でも、〝正直にしていれば、誰が乗じたって怖くはない〟のです。嘘がない心の中は気持ちがいいだろうなと思います。温度の低い風がいつも吹き透っているような軽やかさ。坊っちゃんの心の中は、そんな感じなのかもしれません。それを、清は知っていたのでしょう。

遠く離れてみて、坊っちゃんは、初めて清のことを思います。町内の人々からは乱暴者の悪太郎とつまはじきにされ、家族にさえ好かれなかった彼に、あなたはそのままでいいのだと言ってくれた人。いつかあなたは立派な人になると、その未来を無条件に信じてくれた人。清の存在は、坊っちゃんにとって、どれほど大きかったことかと思います。

どこまでも歯切れよく、感傷とはほど遠く展開していくこの物語には、静かな優しい低音がつねに響いています。清の坊っちゃんへの愛情。坊っちゃんの清への思慕。それが、このお話を、ただ痛快

なだけのお話にしていません。

そもそも、これは痛快なお話といえるでしょうか。たしかに鉄槌は下しました。ぽんぽん短く語る坊っちゃんの言葉には、笑ったり、うなずいたり、溜飲をさげたりできます。けれど、結局のところ、うらなり君は遠い地へ赴任し、職も住む場所も手放したのは、正義を成したはずの坊っちゃん達の方でした。これは、ほろ苦く、少し寂しい物語でもあるのです。

だからこそ、

「だから清の墓は小日向の養源寺にある」

この文で物語が終わるとき、感じる平穏に驚き、胸を打たれます。

審査講評

物語に一貫して流れる「静かな基調低音」である「清の坊っちゃんへの愛情」「坊っちゃんの清への思慕」を表わす言葉として最後の一行を選ぶセンスが素晴らしい。物語をしっかりと読みとれている端正な感想文。

《中学生の部》

優秀賞

いつか「わたし」を発揮できる日にむけて

大阪教育大学附属平野中学校　2年

北村　眞珠

作品名『門』

選んだ一行

地面からも、屋根からも、春の記憶を新たにすべき湿気がむらむらと立ち上った。脊戸に干した雨傘に、小犬がじゃれ掛かって、蛇の目の色がきらきらする所に陽炎が燃える如く長閑に思える日もあった。

「門」は陰鬱な小説である。悶々と悩み、ことを起こせない主人公宗助が争いや世間のしがらみや社会の毒や自分のふがいなさから心の逃亡を続けているのである。落ちはない。ただ、若い頃親友の妻と恋に落ちそのまま結ばれてしまったことが主人公の罪であり、貪欲に世間を闊歩できなくなった理由であることが小説の後半で明かされる。

漱石は学習院での講義で「自己の個性の発展をし遂げようと思う

ならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない。（中略）自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時分から社会的教育を受けているのです。（「私の個人主義」青空文庫）」と述べている。「門」の中で宗助は、自分の愛を貫き自分本位に行動する権利を行使した結果、他人の自由を傷つけてしまい、その罪の意識や世間の目から逃れることができず、苦しみ続ける冬の時代を過ごすことになる。わがままな自由は他から排斥され踏みつぶされる。本当の自由は義務心をもつものであるという漱石の個人主義を反映しているように思った。

私が小学生のころ「休み時間はみんな仲良く遊びましょう」やら「一人ぼっちをつくらない」といったクラス目標が掲げられ、読書をしたいと思おうが、一人でいたいと思おうが、容赦なく児童に襲いかかった。おとなしいという個性はマイナスに捉えられ、皆が一緒に同じ方向を向いて明るく行動することが正しいと捉えられた。学校というある意味権力が個性を強要しているのではないかと思うことがある。社会性を身につけるためなのだろうか？私は、協力して働ける力は、同じように行動する力ではなく、自分の力を発揮できる力と他人の力を尊敬できる力であると漱石の言葉から感じた。他人の自由を認めることが自分の自由を行使する条件であると理解することが社会性、協調性につながると思うのである。私はすでに中学生である。違うことを変わり者ではなく個性の輝く人と認めあえる教室にできるように進みたいのだ。

小説の終わりで、少し事態が明るい方向へ向き、宗助も少し前に進むと、周りも少し前へ進み、季節が春を迎える。まだ、おぼつかない足取りだが、前へ進み始めたことの比喩にまだ鳴きはじめで下手な鳴き声の鶯の問答が引用される。そんな春の訪れが視覚的に描写されたところが「地面からも、屋根からも、春の記憶を新たにすべき湿気がむらむらと立ち上った。脊戸に干した雨傘に、小犬がじゃれ掛かって、蛇の目の色がきらきらする所に陽炎が燃える如く長閑に思える日もあった。」なのである。長い長い冬も春を迎える日に続いていると、ほとんどすべてのことがスカッと解決するわけでなはい日々の心に暖かく寄り添ってくる文である。

審査講評

文章力が卓越している。自分の過去と重ねながら、「私の個人主義」をベースに「協力して働ける力」「社会性・協調性の条件」という大事なメッセージを引き出している。そこから「門」の宗助が前に進み始めたことを象徴する描写を選んだことに早熟な才能を感じた。

《中学生の部》

朝日新聞社賞

罪の意識

新宿区立西新宿中学校　3年
茂田　さんご

作品名『夢十夜』
選んだ一行
分っては大変だから、分らないうちに早く捨ててしまって、安心しなくってはならない様に思える。

「分っては大変だから、分からないうちに早く捨ててしまって、安心しなくってはならない様に思える。」これは夢十夜の第三夜で、盲目の自分の子をおぶった「自分」が心の中で考えていたことである。その子供はまるで「自分」の心を見透かしたような事ばかりを言い、「自分」はそれを不気味に思う。

普通に読めば、この子供は自分の子、もしくは自分が殺した一人の盲目と読みとれる。しかし、この子供は「自分」の罪の意識なのではないかと私は考える。作中にこんな一文が登場する。「只背中に小さい小僧が食付いていて、その小僧が自分の過去、現在、未来を悉く照して、寸分の事実も洩らさない鏡の様に光っている。」自分が犯してしまった罪の細かい所まで、一番よく知っているのは自分自身。これは、一生変わらないことだ。しかし、私が作文の初めに紹介したように、その罪の事をきれいさっぱり忘れ去って、安心してしまいたいという気持ちも同じ位強くもっているはずだ。最後に「自分」は、一人の盲目を殺したのだとようやく自覚する。その途端に、背中の子が急に石地蔵のように重くなり話は終わる。これは、「自分」が犯した罪の重さが、自分自身にのしかかってきたのだと私は思う。もし人の物を勝手に使ったりした場合は、謝罪で済むだろう。しかし、殺人となればどうなるか？まず、謝罪では済まされないし、少なくとも刑務所で何年かはお世話になるだろう。

これらのことは、この作品内に限ったことではない。昔にも、現代にだってある。さて、いきなりだが自分が思い出したくない位重い罪をもっているか？また、それはどんなことで、いつの話だか覚えているか？重い罪なんて、生まれてこのかたもっていないという人もいれば、あるかもしれないけどよく覚えていないなど、様々いるだろう。ちなみに、私は後者の方だ。人は、自分にとって都合の悪い事を忘れやすくなっている。だから、事実とは少し記憶が異なっていたり、思い出せないということも多々ある。逆に、自分にとって都合の良い話だったり、人にやられて嫌だった事は覚えていることが多い。例えば、「夏休み中に家族と旅行にいく。」とか「昔○○君（ちゃん）にいじめられていた。」などだ。私も、過去に人に

されて嫌だったことはよく覚えているし、その内容も具体的に覚えている。ただ、相手にとっては都合の悪い話なので、私とその相手とでは記憶の食い違いが生じるだろう。

夏目漱石は、自分が犯した罪を一番良く知っているのは自分自身だが、その罪を一番忘れ去ってしまいたいのも自分自身だと伝えたかったのではないかと私は考える。そして、自分から逃げずにその罪を思い出して、真摯に受け止めて一人の人間として強くなってほしかったのだと私は思う。私は、自分が人に嫌な事をしてしまった時は素直に謝罪をして、人として強く成長していこうと思う。

審査講評

背負う子供は、自分の犯してきた「罪への意識では」と問う読みは確かだ。そして、その罪と「自分」との関係性をよく考えている。

《中学生の部》

紀伊國屋書店賞

明治時代の地理感覚

成城中学校　2年

志田　丞

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

「西の方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う

四国に赴任する坊っちゃんが清に行き先を説明する場面である。清は、坊っちゃんの家で働いていた下女である。「坊っちゃん」が書かれたのが明治三九年であるから、作品の時代もその当時であるとすれば、明治維新から三十年以上が経過し、封建制は終わって文明開化によって交通手段も発達し始めた頃ということになろう。

調べてみると、明治二二年には東海道線が新橋から神戸まで開通しているというので、作品中では明らかにされていないが、坊っちゃんも東海道線に乗って松山に向かったのだろうと思われる。そのような時代背景にあって、いまだ四国の所在が分からない人物が、

ごく普通に存在していると作品で描かれていたことは、非常に興味深いと思った。

人の地理感覚というものは、おそらくその人の日常的な行動範囲や、その人が考えを及ぼす範囲によって決まってくるのだろうと思われる。例えば、私の場合であれば、自宅や学校がある東京二三区の西側が主な行動範囲となるし、鉄道に関心があるので自分にとって興味のある鉄道路線が存在する場所については、地図を見るなどして、自分が住む東京からの距離感を考えたりする。一方で、日本国外については今のところよく出かける場所でもなければ、特に興味をもつ場所でもないことから、国の場所や距離はよく分からない。誰かに知らない国の名前を出されて、それが南の方だと言われれば「それはインドネシアのさきですか手前ですか」と問うかも知れない。なぜインドネシアが出てくるかと言えば、日本の古い鉄道車両がインドネシアに輸出されているから、インドネシアには少々の興味があるからだ。

そう考えると、清が西の方と言われて箱根を基準にしているのは、清にとって箱根に何か思い出があったからなのかも知れない。清は、もとは由緒ある家の出ということになっているので、もしかしたら、下女になる前には、箱根に出かけられるような家だったのかもしれないと想像するのである。それは若い日、あるいは幼い日の清にとって楽しい記憶で、大切な思い出だったのではなかろうか。それと同時に、鉄道がまだろくに通ってもいない時代の箱根、ロマンスカーもない時代の箱根は、さぞかし遠い場所だったに違いない。だからこそ、清は自分の大切な坊っちゃんが西に行くと聞いて、あの箱根より遠い場所なのかどうなのかが気になったのだろう。箱根の先と聞けば、清にとっては、二度と会えないくらいの遠い場所とでも思えたのではなかろうか。

作品中では、四国に出発する前の何気ない場面であるが、明治時代の人の地理感覚を思い起こさせ、清という忠義の奉公人の心情もうかがい知ることが出来る場面ではないかと思うと、非常に印象に残ったのである。

審査講評

非常にユニークな視点。感想文というと心理分析に目が向きがちだが、明治時代の地理感覚の視点から「坊っちゃん」に注目し、登場人物のセリフを分析している。

《中学生の部》

新潮社賞

漱石の信念、私の信念

日本女子大学附属中学校　1年
渡辺　佳奈

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　それじゃ私も辞表を出しましょう。

「それじゃ私も辞表を出しましょう。」人は退職することをこのように簡単に決められるものなのだろうか。私は、この一文に主人公の良さや欠点、思いが全て詰め込まれていると感じた。

教師という職を失ったら一体どうするのか。後先考えず人情で動いてしまうこの場面に、坊っちゃんの単純明快で無鉄砲な思考が表れており、ぶれることのない芯の強さや優しさがまっすぐ私に伝わってきた。坊っちゃんが辞表を出すと迷いなく言い切ったのは何故か。校長が同僚を辞職させた分、坊っちゃんの給料が上がると言ったからである。坊っちゃんにとって不利になることは何も無いはずなのに、そんな不人情なことはできまいと言い出した。私は、履歴なんかより義理が大切だと坊っちゃんが言ったことが印象的だった。自分の信念に反していることはしたくないという思いだけで、辞職まで口に出す主人公が私は好きだ。年を重ねるごとに色々なものが邪魔をして、自分の感情のままに動くことができなくなってくる。理不尽な世の中に染められてしまった教師達の中で、意志を貫くことができるのは尊敬に値する。周りの勢力や利益を優先させた考え方に屈しず、なおまっすぐ在り続けるのは、どんなに難しいことだろう。苦しく険しい道だ。しかしきっと坊っちゃんはこの態度が素なのだ。それは育った環境も関係していると思う。家族は兄ばかりを褒め、味方でいてくれるのは清一人。この状態で人格形成をする幼少時代を過ごした。一人で己を見つめ続けてきたからこそ、物事を判断するときに信念を一番にできるまっすぐな人になったのだろう。坊っちゃんにとって、あまり幸せとは言えない家庭環境ではあったが、成長してからの自分に繋がったと考えれば大切な時間だったとも思える。しかし、これは私の考えであり、坊っちゃんはずっと幸せだったのかもしれない。味方は清一人であったが、そのことを辛いと匂わせる描写は無いように感じる。きっと一人しかいないではなく、一人いると捉えていたのではと私は考える。どんな状況下でも明るく捉えれば幸せである、ものは考えようだと教えてもらった。

漱石が描きたかった人物像が読み手にダイレクトに届く。私は前文でこの態度は素だと述べた。しかしこう思うからこうしたいと、

はっきり意思表示ができるようになるまでに様々な葛藤を乗り越えてきたのかもしれない。坊っちゃんのような人になりたいとは、一概にはいえない。なぜなら信念を大切にしている故の不器用さや融通のきかない部分があるからだ。皆がこういう性格になってしまったら、毎日ぶつかり合ってしまうだろう。しかし利益や履歴を優先させず、信念で動くことができるところは本当に素敵だ。私も自分の信念を大切にしていきたいと思う。

信念を大切にまっすぐ生きていくことで、忙しない日々のなかでも大切なことを見失わずにいられる大人になりたいと心から思う。

審査講評

坊っちゃんの「芯の強さ」を、清だけが味方だった幼少期の「人格形成」に求め、さらに様々な「葛藤」を乗り越えた結果とみる視点がユニーク。平易な言葉で、独自の洞察を深めている点が素晴らしい。

《中学生の部》

早稲田大学賞

生と死の大切さ

日本女子大学附属中学校　1年
佐藤　花音

作品名『変な音』
選んだ一行
三人のうち二人死んで自分だけ残ったから、死んだ人に対して残っているのが気の毒のような気がする。

私が夏目漱石が書いた「変な音」を読み、心に響いた一行は、「三人のうち二人死んで自分だけ残ったから死んだ人に対して残っているのが気の毒のような気がする」という一行だ。なぜこの文に惹かれたのかというと、そこに「生」と「死」を感じさせられたからだ。

この話は、病院で起こった出来事である。主人公は病気で入院している。夜中に聞こえてくる「変な音」について思いをめぐらす。シーンとしているはずの病室から山葵おろしで大根か何かをごそごそ擦っているような音が聞こえてきた。主人公は食べ物さえ病室で

は食べることを禁じられているのに、大根おろしのような音が聞こえてきて、とても気になっている。

この作品にはその他にも「生」と「死」が感じられるいくつかの音がある。例えば、看護婦を小さい声で起こしているような音、回診後の低い話し声、医者の声、患者の室にこそこそ出入りする人の音、新しい患者が入ってくる音など様々だ。私も入院した経験があるので、共感するところもある。隣の入院患者の話し声が気になったものだ。

主人公が入院する病室は重い病気を抱えた患者がほとんどだった。向こうの端からこっちの果まで響くような声を出して始終げえげえ吐いている音はまさに「死」の音である。

主人公の病状は周りの人に比べると、比較的軽かった。日を積むに従って、快方に向かっていった。しかし、自分が死に向かっていると悟っていた隣室の患者は、主人公が立てる安全髪剃りを革砥へかけて磨く音を運動をする機械の音なのではないかと思い、羨ましがっていた。死にたくない、病気を治して早く元気になりたいという願いを投影してしまったのではないかと、私は思った。人は、その置かれた環境によって、感じ方が変わる。もし、私が隣室の患者だったら、同じように感じたかもしれない。

このように、夏目漱石が読者に伝えたかったことというのは、「変な音」は音を中心にして、相反する「生」と「死」なのではないだろうか。もっと言うと、変を中心に握えた「生と死の対比」なのではないか。結局、音というものは、目には見えないもので、だからこそより想像力をかき立てられる。環境や状況によって、また個人によって、全然違った印象を持つことがある。私はこの本を読み、「生」と「死」について考えさせられた。

私が心に響いた、「三人のうち二人死んで自分だけ残っているのが気の毒のような気がする」ということを夏目漱石は書いているがこれは、これまでずっと病室に居て生きる気力を無くしていた主人公は、「生」と「死」の音を聞いたことによって、「生きる」ということの大切さというものを読者に伝えたかったのだろう。

審査講評

他の生徒がほとんど取り上げることのない「変な音」を対象としたこと自体が面白く、音の内包する生と死の意味を的確に読み取っている。

《中学生の部》

佳作

「出会い」と「死」

新宿区立牛込第三中学校　3年

勝部　真衣

作品名『こころ』

選んだ一行

自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起こります。私はしかたがないから、死んだ気で生きていこうと決心しました。

「先生」は、主人公「私」に宛てた遺書の中で、友人Kの死後、妻と二人でくらしてゆく中で生まれた気持ちをこう語っている。「自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起こります。私はしかたがないから、死んだ気で生きていこうと決心しました。」私は、この文章に大きな矛盾点を感じ、どうしてもひっかかって仕方がなかった。しかしそれと同時に、この気持ちに何らかの共感を覚えた。

よくよく考えてみると、「自分で自分を殺すべき」というのは、後の文章からして、自殺という具体的な行為をあらわしているのではなく、「自分の魂を消し去る」という本心の思案を意味しているのではないだろうかと思った。それが「死んだ気」という状態であり、その気持ちが、世間的にも活発に活動していた彼を、書物に心を埋めるほどにさせたのだと思う。

しかし、なぜ彼はこれほどに自分を追いこみながら、自殺という選択をしなかったのだろうか。ここには、彼の深い決心があると思った。「死」というものは、人間が必ずむかえる最期だが、突然くるものもあれば、じわじわと迫ってくるものもある。自殺をした「先生」の友人Kには精神的な苦しみがだんだんと迫っていたのだと思う。もちろん「先生」にも、苦しみや葛藤がいろいろとあったはずだ、Kの死に対しての自分の責任、そして何も知らされずに不安を抱き続ける妻や、何かに縛られたような、息苦しい生活に対して。こんなに苦しみを味わいながら生きるよりは、Kのあとを追って死を選ぶのが一番楽な選択だ、と彼も何度も思っただろう。生きている限り目を背向けることのできない真実から逃れることができる。それでも彼は、生きていこうという決心をした。これは決して、前に進むための希望をもった決心ではない。私はこの部分から、自分自身をかたく縛りつけておこうとする、強い覚悟を感じた。

遺書の中の言葉を借りれば、彼は自分の犯した「人間の罪」を背負っていく覚悟をした。法で裁けるようなものでない以上、自分自身で見つめていくしかない。あきらめて楽な道を選べば、それは

「負け」だ、という気持ちが、彼の言葉の中からみえた気がする。そして、この一種の根情が、私が最初に共感を抱いた理由でもあると思う。

しかし、彼が最後にした選択は、やはり自ら死ぬことだった。これには、「私」との出会いが深く関わっていると思った。「先生」は遺書の中で、誰も知り得ない過去を「私」だけにすべて告げた。それほどに「私」が「先生」の中で大きな存在になったのだと思う。その結果が死であれ、この出会いはお互いにプラスなものであった。出会いは人の考えを変え、時には、苦しみや縛られたものから解放してくれる力をもっている、と深く感じた。

《中学生の部》

佳作

「坊っちゃん」になりたい！

学習院女子中等科　1年
瀬戸口　真衣

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
「それじゃ私も辞表を出しましょう。」

「それじゃ私も辞表を出しましょう」これは、主人公「坊っちゃん」が着任した中学校の校長、「狸」が同僚の「山嵐」に対して辞表を出せと言った際に、坊っちゃんが狸に向かって放った言葉だ。私は、この言葉に衝撃を受け、心揺さぶられた。なぜなら、この言葉から坊っちゃんという人物の人間性がよく伝わったからだ。実を言えば、私は坊っちゃんに憧れの気持ちを持っている。辞表を出すなどという自分の将来に関わる重要なことを心が感じたまま瞬時に発言することは、果たして私にはできるだろうか。多分、とてもむずかしい。しかし、私は、坊っちゃんのように自分自身の心に正直に生きることは、素晴らしいことだと思っている。そこで、どのよ

うにしたら坊っちゃんのようになれるかを考えてみた。まずは、自分の信念を曲げないことだ。前述の場面では、辞表を出すといった坊っちゃんに対して、狸はもう一度考え直すよう言った。多くの人はそこで自分の気持ちよりも損得や人間関係などを考え、思い直すのではないだろうか。しかし、坊っちゃんは、自分の信念に基づき一度決めたことは絶対に曲げない。結局教師を辞めて東京に戻ってきてしまう。次に、心が子供のままでいるということだ。坊っちゃんは、己の思い通りに事を運ぼうと陰謀を図った教頭「赤シャツ」を懲らしめるため、山嵐と一緒に宿屋に毎日張り込んだ。そして、赤シャツが現れると、感情のままにぽかりと殴ってしまう。いかにもやんちゃな心を持ち続けている坊っちゃんのやりそうなことだ。これら二つの素養があれば、かなり坊っちゃんに近づけそうだ。しかし、仮に坊っちゃんのような人になれたとしても、今の時代生きていけるのだろうか。現代では、このような人は自分勝手な乱暴者だと世間から見放されてしまうだろう。だが、だれもが皆、心の奥では坊っちゃんのように生きたいと願っているのではないかと思う。これから私たちが生きていくなかで、坊っちゃんのように、自分の心のままに行動したいがそれは難しかったり不可能だったりする場面が多々あるだろう。それが成長する、または大人になるということであり、子供がだだをこねているような生き方は、正しくないと否定されてしまうこともあるかもしれない。私は、成長することは大切なことだし、狸や赤シャツのように本音と建前を使い分ける生き方を否定するつもりはない。しかし、私は、子供の心のなかにこそ、自分自身の本質があると思う。だから、坊っちゃんのように生きられる世の中にしたいと夢見続けることが、子供の心を失わない大人になるために必要になるのではないかと思った。多分、坊っちゃんのようになることが重要なのではない。坊っちゃんのようになりたいと願う人が少しでも増えることが、社会にとって大切なのだ。作者である夏目漱石も、そう願っていたひとりだったに違いない。坊っちゃんが大騒動を起こしていく姿を漱石が追いかけている。そんな様子が、今鮮やかに浮かんでいる。

《中学生の部》

佳作

夏目漱石「坊っちゃん」を読んで

学習院女子中等科　3年
打田　梨華

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　べらぼうめ、先生だって、できないのはあたりまえだ。

「べらぼうめ、先生だって、できないのはあたりまえだ。」

これは、「おれ」に生徒の一人が幾何の問題をたずね、分からないと答えた際できんできんとはやした生徒達に対してのものだ。この言葉は一見「当然」のようにも思えるが、自分の身の周りや経験をふり返ると、どうやらそうでもないらしい。

私たちは、生まれながらにして「個性」を持っている。そして、その個性というものはあくまでも自分自身の象徴であって、決して他人が決めつけていいものではないのだ。

現代でよく耳にする「男なのだから」「女なのだから」という言葉こそ代表的な例だろう。たしかに、性別や生まれた環境などで、ある程度個性というものはきまってしまうものだ。それでも、それがその人の「固定概念」として固まってしまうのはあまりにももったいないと言わざるを得ない。「この子はこうだから」と縛り付けられて、本来あった才能などもそんな些細な言葉で制限されてしまっては、あまりに窮屈だ。

また、「他人から決めつけられた個性を、自分の個性だと錯覚してしまう」ということも少なくない。一つ例を挙げるとするならば、それは「幼少期から受けた言葉」だ。「この子は内気で人見知りだ」と言われ続ければ将来的にコミュニケーション障害になりやすく、「明るくて笑顔の絶えない子」と言われ続ければ、無理にでも明るくふるまうようになるというケースが実際に存在する。特にそれが親からの言葉なら尚更だ。幼い子供はその言葉を真に受け、信じ、その通りの行動をせざるを得なくなる。「三つ子の魂百まで」とはよく言ったものだ。

今回私がこの一文に惹かれたのは、私自身、「他人から個性を決めつけられる」ことを、「当然」だと思っていたからだ。彼は「先生」という個性を押しつけられてもだから何だと言ってはねかえし、自身を誰にも左右されずに真っすぐ信念を貫いていた。私はおそらく、そんな彼の姿に圧倒されてしまったのだろう。何度読み返しても、必ずこの言葉で止まってしまうほど、私は強く心を打たれた。

現代では「個性を大切にする社会づくり」が注目を集めている。しかしこれらの現状をふまえると、まだまだ実現は難しいように思

えてならない。

自分の個性は本当に自分自身の物か、他人を縛りつけていないか。これを機にふり返ってみるのもいいかもしれない。「他人から個性を決めつけられる」ことを「当然」と思っていた自分などこの際すてて、新しい自分の信念を貫い見よう、なんて、それはあまりにも「無鉄砲」か。

《中学生の部》

佳作

「運命」と「宿命」

学習院女子中等科　3年
吉田　弥生

作品名『虞美人草』
選んだ一行
運命は神の考えるものだ。人間は人間らしく働けばそれで結構だ。

私が漱石の作品の中で印象に残った一文は、「虞美人草」にある運命に関するこの文章である。漱石の作品には、この「虞美人草」以外にも、「こころ」「道草」などにおいて運命に関する表現が見受けられるが、この「虞美人草」においてほど、運命を天に任せた表現は他にない。それはもしや漱石自身が複雑な家庭環境の下で育ったことにより、自分の力でどうにもならない事象を神が定めた「運命」として受け入れることで、自らの存在を肯定し、結果、心の均衡を保っていたためかもしれない。

しかし、私は漱石とは逆に「運命」は自分自身で決めるものであると考える。とはいっても私も昔から何かうまくいかないことがあった時「仕方がない」「今回はたまたまダメだった」と安易に運命のせいにして、自分の努力不足から目をそらして逃げてしまう癖があった。その頃の私であれば、この漱石の一文を読んで、かの夏目漱石もそう仰る、と本来の漱石の意味をはき違え、我が意を得たり、と思っていたであろう。

しかしそんな私の心を変えたのが、中学の授業で出会った「宿命」という言葉である。「宿命」と「運命」。その違いが分からず、調べた結果、この二つは似て非なるものであるという結論に至った。私の理解では「宿命」とは、その名のとおり「宿る命」、つまり生まれつき前提条件として決まっていること。一方「運命」とは「運ぶ命」、生きてから自分で経験して、切り開いていく道のりのこと。例えて言うならば、私が両親のもとに吉田家長女として生まれたことは「宿命」。その先どんな人と出会い、経験し、どんな人生を歩むかは「運命」、ということだろうか。そう思うと「運命」とは自

分次第。神に任せるなど恐れ多くてとてもできず、自ら責任をもって、その道を切り開くべきものであると考える。もっとポジティブに示せば、「運命」は自分の意思や行動によって、いかようにも変えることができるのだ。「運命」とはなんと深い言葉であるかと身が引き締まり、これまでの自分の甘えを恥ずかしく思った。

というわけで、漱石には大変申し訳ないのだが、私は運命とは神が与えるものではなく、自分の心が決めるものだと考える。実際漱石も、幼少期の宿命は不遇な環境であったものの、自身の努力と才能により運命を切り開き、歴史に名を残す作家となられた。

私も私らしく、目の前のことに一生懸命取り組み、漱石が言うところの「働き」、その結果努力の積み重ねとして、運命を創る力を持つ大人になりたいと思う。

《中学生の部》

佳作

鶴嘴

成城中学校　2年
小田川　陽知

作品名『私の個人主義』

選んだ一行

ああここにおれの進むべき道があった！ようやく掘り当てた！こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしょう。
容易に打ち壊されない自信が、その叫び声とともにむくむくと首を擡げて来るのではありませんか

『私の個人主義』は、夏目漱石が若者に向けた講演会で述べた作品のため、自分の身にも置き換えやすかった。作品では、エリート街道を進むも、悩み多き漱石自身の過去を振り返りながら、個性や権力、金力について書かれており、どれも自分の将来必要になるであろう事が多く、自分の心に深く刻まれた。

特に、僕は次の1行を読んで、衝撃を受けた。『ああここにおれの進むべき道があった！ようやく掘り当てた！こういう感投詞を心

の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしょう。容易に打ち壊されない自信が、その叫び声とともにむくむくと首を擡げて来るのではありませんか。』というところだ。何故なら、将来、自分の道を掘り当てるヒントに出会えた感覚があるからだ。自分の進むべき道を見つけることがとてつもなく大変で苦しいものだが、それを見つけた時にようやく心に迷いがなくなり安心することができるという大切なことをわかりやすい言葉で教えてくれている。自分の進むべき道が見つからなかったり、自分のやっている事に自信が持てない時には、なんとなく物事を進めたり、思いっ切りできない状態になってしまうだろう。例えば、なんとなくやりたいことがないまま大学に行って、就職・・・という生活を送るとか。本文中の言葉を使うと、『腹の中の煮え切らない、徹底しない、ああでもありこうでもあるというような海鼠のような精神』を抱きながら生活を送るとか。そんな生活ではいけないと思い、なにかしなくてはいけないと思っても、何をして好いか見当がつかないとか。そして、そういう生活を送る人はどう感じるのか。どういう精神状態になるのか。それは実際そのようなことで懊悩していた漱石自身が痛感している。この本にも記してあり、『不愉快』とか『苦痛』に感じるらしい。

また、僕はこの1行と向き合っていた結果、この1行の最後に付け加えたい、自分で考えた文がある。それは、「ただし、進むべき道を見つけるだけで満足せず、その叫び声の勢いに乗せられて、道を進むために行動しなければならない。」だ。何故付け加えようと思ったのか。それは、人生というものはどんな些細な事でも、どちらの道に進むかの選択と、その選択した道をどのようにして進むかの行動で決まっていく。つまり、選択と行動で決まっていくということや、行動をしなければ、道を前に進めない事に気づいたからだ。

僕は幸いにもこの年齢で、この本に出会い、色々なことを知ることができた。このことをありがたく思い、様々なことを体験する中で、自分の進む道について意識していきたい。そして、この一行に出会ったことで、今、自分の手には進むべき道を掘り当てるための『鶴嘴』がすでに握られているのだと感じる。さあ、採掘の準備は万端だ。

《中学生の部》

佳作

こころのなか

跡見学園中学校　3年
中山　桜

作品名『こころ』
選んだ一行
「私の過去をあばいてもですか」

「私の過去をあばいてもですか」この一言から私の胸が踊った。さぁ、今から何が始まるのだろう、何が起こるのだろうと。

「先生」の心の奥に秘めていた過去を若者の「私」と知り合った事で少しずつ打ち明ける気持ちになっていく、自分自身への後悔や、妻への心咎め、友人への申しわけ無さ等、全てを背おって生きて来た「先生」の心の中がとても克明に描かれている。現代の人気脚本家がドラマにして、音楽が付くと、どんな風になるだろうか、と考えるだけでわくわくしてきた。

私の過去をあばいても、聞きたいこと、聞きたいと思えるような状況になった「私」の心も「先生」と同じように動揺したのではないだろうか。人間は、相手が何を思っているのか、自分がこう言うと相手がどう答えてくるのかが不思議なもので、何となく分かる。たまに、突拍子もない返事が返ってくる時以外は。「先生」にはそれが分かっていて、この言葉を言ったように思う。よく、この話はエゴイズムだと言われる。しかし、私はそうは思わない。恋愛や勝負ごとにおいて、エゴイズムという言葉は、違うと思う。放っておいたら取られてしまう、負けてしまうのだ。それが分かっていたなら尚更、理性を保てるだろうか。しかし、その後は友を想い墓参りを続けて遺書を書いてこの世を去ろうとする。その生き方において、全てが人間としての全身全霊をかけた立派な償いであり、想いであったと思う。ただ、何も知らない妻に対しては、淋しい想いだけが残るのが気になった。残された妻は、何と想うだろうか。果たして、「私」は先生の事を妻に話さずにいられただろうか。私なら、黙っていたと思う。悲しみに暮れるであろう妻に、また一つ悲しい過去を知らせてしまうのは罪でもあるように思ったからだ。

私はまだ、中学三年生なので大人の心の奥までは読めない。しかし相手の気持ちになり考える事は出来るはずだ。人を傷つけないようにしていても、自分では分からないうちに傷つけてしまったりしている事もある。人の心は、いつもは強いと思う。しかし、何か一つ小さな傷ができるとそこが、すぐ治る日もあれば周りにつつかれて悪化してしまうこともある。人に優しくなるには、自分が強くならなければできない。人を助ける事はできない。自分を強くするた

めに、私はこれからも、広い視野で沢山の物事を見たり聞いたり、沢山の人に出逢い色々な事を学んでいきたいと思っている。

《中学生の部》

佳作

ありのままでいる強さ

大妻中学校　1年
遠藤　ゆくり

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
考えてみると世間の大部分の人はわるくなることを奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。

「考えてみると世間の大部分の人はわるくなることを奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する」

私が「坊っちゃん」という作品の中から、この文を選んだ大きな理由は、この文が「坊っちゃん」という題名の由来になり、作者が伝えたかったことの一つだと思うからです。

坊っちゃんは子供のころから無鉄砲で、いたずらが過ぎ、私は読み始めの頃「いったいどんな話が待っているのだろう」と先を楽しみにしていました。

そして案の定、赴任した学校で出会った先生たちに、あだ名をつけたり、教えている生徒たちにいたずらをされたりと坊っちゃんの愉快な話で物語は進みますが、読みすすめていくうちに坊っちゃんに教えられることや気づかされることがありました。私が選んだ文も、その一つです。

特にこの文で私は色々なことを感じさせられました。

「世間がどうだろうと、坊っちゃんと言われようと、おれは自分を信じて生き抜く」この文は、こんな坊っちゃんのセリフとして置き換えられるのではないかと思います。そして、この時私は率直に坊っちゃんを「カッコいいな」と思いました。そして坊っちゃんのいつも真っ直ぐでいられる強さに尊敬しています。

そして坊っちゃんが、この強さを保ちつづけるには他の人の支えもあってこそだと思います。そして坊っちゃんにとって何よりも、かけがえのない存在となったのは、やはり「清」でした。清は、人に好かれない坊っちゃんを唯一かわいがった人でした。清はよく、

坊っちゃんに「あなたはまっすぐでよい御気性だ」とほめています。きっと清も私と同じように、いつも真っ直ぐでいられる坊っちゃんを「カッコいいな」と感じ、尊敬していたのだと思います。そして坊っちゃんもまた、清への信頼は大きいものだったと思います。

しかし、坊っちゃんみたいな人が現実にいたら、きっと邪魔者扱いをされたり、面倒臭いと思われ、人間関係が上手くいかないと思います。だから私は坊っちゃんのようになりたいとは思いません。他人のためを思ってつく嘘や友達に合わせるために言う悪口もあると思うからです。坊っちゃんは「世間の大部分の人はわるくなることを奨励しているように思う」と考えています。きっと私もその「大部分の人」の中に入っていると思います。

でも、そんな考えをもつ坊っちゃんに私は伝えたいです。「ありのままの人間でいられるほど人間は強くないんだよ」と。

私が、選んだ文で一番感じさせられたことそれは「人間らしさ」でした。

《中学生の部》

佳作

あたたかい心

大妻中学校　1年
篠原　愛

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
「この時ばかりはまじめになって、始めからしまいまで読み通した。」

私が『坊っちゃん』の中で一番心に残った場面は、清からの手紙がきた時の坊っちゃんがその手紙を読む場面です。

小さい頃の坊っちゃんは、友達に少しからかわれただけで、本当に二階から飛び降りてしまったり、ナイフで自分の指を切ってしまったことがありました。私はそういう坊っちゃんを冗談が通じなくて、友達もできず、皆とコミュニケーションが取れない、少し変わった子供なのだと思いました。また両親からもあまりかわいがられていなかったので、かわいそうにも思えました。

大人になった坊っちゃんが四国の中学に赴任し、数学教師になっ

てからも、そこでは、天ぷらそばや団子屋にいるところを生徒に冷やかされ、怒ってしまったりと、生徒とも打ち解けることができませんでした。赤シャツや山嵐などの先生達ともうまくコミュニケーションが取れていなく、少し変わった人なのかなぁと思いました。

しかし、そんな坊っちゃんでも、小さい頃から面倒を見てくれ、大切に思ってくれている清という存在がいました。

四国に赴任中のある日、清からの手紙が届きます。長くてわかりにくい手紙であったにもかかわらず、この時ばかりはまじめになって始めからしまいまで読み通した、また、読むのに骨が折れてまた読み直し、部屋が暗くなったら椽鼻へ出て腰をかけながら丁寧にまた拝見したと書いてあるように、どんな時も坊っちゃんを支え、励まし、心配し続ける清との揺るがぬ愛情と信頼を感じました。また、その時の場面の様子を想像すると、初秋の風が吹いていて、何とも言えない切ない気持ちになりました。口数の少ない坊っちゃんでも人として大切な「あたたかい心」、自分の面倒や気にかけてくれる清に対して、感謝の気持ちを持っているのだと清との手紙を通じて感じました。

私は、この本を通じて、私自身も、自分の伝えたいことがうまく伝えられない時もあるので、どこかに坊っちゃんのそういう性格もわかるような気がしました。でも、坊っちゃんと清との関係のように、人は誰か一人でもどんなことがあっても自分を信じてくれる人がいたら、勇気を持って生きていけると思いました。『坊っちゃん』の話なのに、坊っちゃんのセリフが少なかったので不思議に思いましたが、孤独な坊っちゃんがどこかに繊細な「あたたかい心」を持っているんだなと感じました。

《中学生の部》

佳作

Life is a boat trip

豊島岡女子学園中学校　2年

吉野　姫菜

作品名『夢十夜』

選んだ一行

「自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行った。」

「自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて

行った。」

これは、「夢十夜」第七夜の最後の一文である。この文からも分かる通り、男は「どこへ行くんだか判らない船」から飛び降りてしまったわけだが、私はこの船は人生を表しているのではないかと考えた。自分の生きる意義を見出せず、つまらなくなり生きることを途中で諦めた男の人生である。

男は人生という長い船旅の途中、色々な人に出会う。天文学を学び、神を信仰する、学問と宗教に生きる人。想い合う恋人と共に音楽を奏でながら、他の事が考えられなくなるほど無我夢中に生きる人。そして、自分と同じように生きる意義を見失い、虚しさや悲しみといった負の感情にとらわれ、しきりに泣いている人・・・。男はそれを見て何を思ったのだろうか。おそらく、自分なりの生きる目的を持った人々を羨むものの、自分と同じような境遇の女性を目にすることで悲しさが強まり、消極的な考えで頭がいっぱいになってしまったことだろう。そんなマイナスな感情にとらわれ生きることを半ば諦めかけた男に、自分が興味の持てるものなど見つかるだろうか。周りの人々と外れた自分の人生が、ちっぽけで、無意味で、虚しい物に思えて仕方がなかったはずである。

では、果たして男にとって、人生を自らリタイアしたことは満足のいく結果だったのか。もう一度一文を見返すと、男はなぜか「無限の後悔と恐怖を抱いて」落ちているのだ。なぜだろうか。それはきっと彼がまだ自分の人生への希望を捨て切れなかったからである。意義が見つけられなくて自分の進む方向も分からなくても、男はやはり生きたかったのだ。自分の可能性を信じていたのだ。だから彼はその場の感情にとらわれて自殺する事を決断した自分を悔いた。

さて、私はこの話を読み終わった時、心の中で、「人生がつまらないから死ぬなんて、なんて馬鹿な男なのだろう。」と考えた。しかし、ふと思った。時々人間はこの男のように悲しい感情に押しつぶされ、自分は何のために生きているのか見失うことがある、と。

ではこの男のようにつらい選択をしないためにはどうすればいいのだろうか。私は「発想の転換」をすることがカギだと思う。悲しい、つらいと思っていた事も考え方一つでプラスに捉えることができる。そのためには、せまい考えに偏らず、広い考えを持ち、自分を多面的に見ることができるようになる必要がある。

もし黒い感情にとらわれ自分が見えなくなったら、この事を思い出し、一歩下がって深呼吸し、自分を多面的に見て「発想の転換」をすれば、「私の」船の目的地が見えてくるだろう。

《中学生の部》

佳作

命が伝えたかったこと、命の重み

熊本市立北部中学校　1年
田尻　茉優子

作品名『文鳥』
選んだ一行
文鳥は可愛想な事を致しましたとある許りで家人が悪いとも残酷だとも一向書いていなかった。

「文鳥は可愛想な事を致しましたとある許りで家人が悪いとも残酷だとも一向書いてなかった。」

私は「文鳥」を読み、自己中心的な主人公の行動と三重吉から、作者夏目漱石が何を主題としたかったのかが理解できた。

主人公は三重吉から文鳥を買うよう勧められて買う。買って間もない頃は主人公も丁寧に世話をしていたが、執筆や用事が重なって文鳥はとうとう死んでしまう。三重吉に報告の手紙を送るときに、主人公は家人のせいにするが、三重吉は手紙でそれを見破った、という話である。私はその三重吉の手紙が心に残った。

私がこの「文鳥」を読み始めて最初に疑問に思ったことは、なぜ三重吉が主人公に文鳥を飼うように勧めたのかということだ。私も以前鳥を飼っていた。親が私に買ってくれたその鳥を私は「星」と名付け、大切に育てた。だが、主人公は最初こそは大切に育ててはいたが、執筆や個人的な用事などと何かと理由をつけて文鳥を世話しなくなった。私はこれを読んで、動物は金で買うものだと主人公は勘違いしていると思った。確かに、動物は金で買って飼うものだ。だが、金で買った動物を大切に思い、飼育するからこそその命は輝くものだ。私と主人公の価値観の違いはそこにあると思う。また、死んだ文鳥を下女に投げて、主人公が下女に死因をなすりつける場面がある。三重吉が誠意で勧めた文鳥。そんな文鳥を自分が死なせたという罪悪感から、このような自己中心的な行動が起き、手紙を書いたのだろう。

なぜ三重吉が主人公に文鳥を飼うように勧めたのか。私は、三重吉が主人公に

「たとへ動物にも、そして人間にも命がある。金で買うような命はない。命は何かを伝えるために生きてきた」

と伝えたかったからだと思う。美しい声で鳴く文鳥にも、伝える「何か」があった。それは、「大切に思う心」だ。だが主人公は、それが分からなかった。個人の都合を優先し、文鳥を大切に思えなかった。だから、「文鳥は可愛想な事を致しました」という三重吉の文は

「文鳥はあなたに『大切に思う心』を伝えられずに死んでしまい、文鳥は可愛想な事を致しました。」と解釈できるだろう。主人公は、個人の都合を優先したばかりに、文鳥を死なせてしまったのである。

私は「文鳥」から、命や動物を大切に思う心を学んだ。また、夏目漱石もそのことを伝えたかったのだと思う。個人の都合を優先し、自身の価値観から逃れられない人は、命の重みが分からない。命や動物を大切に思う心がある人こそ、命の重みが分かる。夏目漱石は、「文鳥」でそれを伝えたかったのではないか。

《高校生の部》

最優秀賞

静かな強さ

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年

八木　乃莉子

作品名『こころ』

選んだ一行

考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから。

女の人は強い。私はこの物語を読んで強くそう感じた。先生の奥さんは、台詞は少ないが、誰よりも人間らしさや、静かな強さを感じさせる。

私は、先生が苦手だ。先生はすぐに理屈だの自分が信用できないだのと、ごたごた言っているが、私には、先生は自分しか愛してないただのナルシストのように見える。主人公との会話の時にも、さも悲惨な人生を送ってきたかの様に言葉の節々に悲壮感を出してる。先生の遺書にいたっては、Kや女の人など他人を見下し、自己愛というエゴにどっぷりつかっている様子が目に見えて、読んでいるこちらが恥ずかしい気持ちになった。先生のやっていることは、理屈ばかり述べて賢そうに見せているが、とても稚拙に見える。奥さんは、そんな面倒くさい自己愛のかたまりの先生を受け入れ、愛しているのだから、すごい器の広さである。Kの自殺の真相についても、私は、奥さんは、全てとは言わないが、ある程度、知っていたのではないかと思う。しかし、奥さんは、先生のようにペラペラと喋らず、自分の中にしまい、まるで知らなかったかのように、先生を愛し、受け入れている。奥さんはきっと、先生よりも恋愛の残酷さや、人の弱さを知っているのだ。それらを全て腹の中にしまい誰にも知られずに、静かに過ごしている様子から、女の人の強さを感じる。先生は、何かにつけ、女が可哀そうだの気の毒だのと言うが、私はそうは思わない。仮に、本当に奥さんを気の毒だと思うのなら、な

ぜ奥さんを残して自殺するのだと、叱咤したくなる。勝手に罪悪感に潰され、死を選ぶのは無責任である。本当に奥さんを愛しているのなら、罪悪感に潰されそうになっても、苦しみながらでも必死に生きるべきである。奥さんは守ってもらうだけのような弱い人ではない。二人で頑張って生きるべきである。しかし、先生は「死」という道ににげてしまったので、弱い人である。

先生が亡くなった後、奥さんはどうなるのだろう。先生しか頼りになる人がいない奥さんがとても不憫に思う。Kや母や先生など身近な人が、全員亡くなってしまうというあまりにつらい人生で、こちらが泣きたくなってしまう。先生を追いかけて死んでしまうのではないかとも思われる。しかし、私は奥さんはきっと、女の強さや意地を見せて、たくましく生きていくのだろうと思う。いや、そうであってほしい。この物語の中で、一番の悲劇のヒロインであるにも関わらず、それらを感じさせない、堂々とした、静かだがどこか芯がある、静の強さを持った奥さんは、やはり、言葉では言い表せない凄みがあると思った。

審査講評

「読んでいるこちらが恥ずかしい」と「先生」の自己愛を断罪する書きっぷりは痛快。「こころ」の奥さんの静かな強さに着目し、この小説の特色を分析しているところに魅力を感じる。

《高校生の部》

優秀賞

女はどのように転生したのか

早稲田大学高等学院　3年
馬場　俊

作品名『夢十夜』
選んだ一行
「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

私の選ぶ一行は『夢十夜』の「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」である。この一行は、男の夢に現れた女が死際に男に遺した言葉だ。この作品を読んだ時、後に男の前に蕾を開いた百合がこの女の生まれ変わりなのだと感じ、「きっと逢いに来ますから」という約束が果たされたのだと思ったことが、この一行を選んだ理由である。私は女が百合に転生した過程を本文中の表現から考察する。

まず、女が流した涙は女の肉体から流れ出した魂であり、百合が弁を開いた直後に落ちて来た露と同質のものだと考える。次に、真

珠貝と星の破片は女の肉体的な転生を暗示していると考える。真珠貝という地上と地下を繋ぐもので女の肉体を葬ることで、女の肉体は死後の世界に届けられる。さらに、真珠貝に月の光が映る描写は、肉体が地下から天上に昇天することを暗示している。また、星の破片については天上から地上に肉体を運ぶものであり、女が転生した百合がこの石の下から生えてくることから、女に新しい肉体を与える役割を持つことが分かる。女が分離したものは魂と肉体だけではない。もう一つの要素は、太陽で表わされる女の生命である。女が死んでから埋葬されるまで、日が昇る描写は一切ない。しかし女の魂が流され、肉体が墓に納められた時、突如として日が月に擡頭する。魂と肉体の処置が適切に行われたために、女の命が転生に向けてのサイクルに入ったのだと考える。女はこのことを知っていたので男にその処置を頼んだのである。仏教には輪廻転生という概念があるが、それは車輪が回るように六道に次々と生を受ける命の周期を意味する。太陽のサイクルは車輪が回る様子と通ずるものがあり、この百年の間、女は別の生を歩んでいると考えることもできる。

百年の時が経つと、女の命の周期が一周して男が待つ世界への転生への条件は全て揃うことになる。女の生命は初めに星の破片から新たな肉体を与えられる。それは人間の姿でなく百合の姿をとっているが、生前の女の特徴をとらえている。命の宿った肉体に、遥の上から魂の雫が落ちて来る。この時点で女の転生は完遂されたといえるだろう。その証拠が遠い空に浮かぶ暁の星である。それまで空に描写されていた月や太陽が消え、その代わりに見知らぬ星が一つ輝くだけになっている。

この星は男の死を暗示しているのか、解釈は色々できるが、女が百合に転生したことは間違いないだろうと私は思う。つまり、女の言った「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」という約束は、忠実に守られていたということだ。

審査講評

「夢十夜　第一夜」に登場する女性の転生を百合の官能性と重ねて分析している点が興味深い。夢の中という特異性を膨らませて、女が転生する様子を突き詰めて真面目に表現しようとしている。

《高校生の部》

朝日新聞社賞

融解

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年

林　奈々穂

作品名『こころ』

選んだ一行

玄関と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張っていた。私は二、三歩動き出しながら、黒ずんだ葉に被われているその梢を見て、来たるべき秋の花と香を想い浮べた。

「また九月に」と言って、それから二人が会うことはなかった。その最後の挨拶を交わした後の描写が、私の印象に残った一行である。

「こころ」という作品には様々な植物が登場する。庭の椿や、墓地の区切り目の大きな銀杏、広い道の両側に植え付けられた楓。これらは、「私」の視界に季節を静かに添えている。そうすると共に、植物は人を思い出に束縛する。誰しも似たような経験があると思うが、私は道端でヒメジョオンを見つけると、母の手を握りながらハルジオンとの違いを一生懸命探した遠い日が瞼の裏に浮かぶ。何かをこうして懐古したとき、感情を溶かされる、という言い方が一番ふさわしく響く。同じように、「私」にも植物による連想が働いていたことは、選んだ一文に続いて「私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離すことのできないもののように、いっしょに記憶していた。」とあることから明白である。なので私は、木犀が別れの木として「私」を束縛するのではないかと思った。このことが、「私」にとって幸せとなり得るだろうか、それとも不幸となって苦痛を与えるだろうか。

私たちは誰だって、幸せになりたがっている。味方になってくれる人を探している。そんな、単純で、当たり前のようなことだけれど、どう味方になるか、どう味方を探すか、それらの方法を忘れてしまう。「先生」は、生きるために死ぬことを選んだ。矛盾しているように思われるけれど、例えば何か大切なものを守らなければならないとき、そのものを守ることのみが生きることに直結するとき、矛盾する選択肢が正解の光を帯びる。「先生」が守りたかったものには妻との幸福や、かつての友人Kへの懺悔、「私」からの信頼が含まれるはずだ。大切だったはずのことが沈黙とともにゆうるりと流れ、そばを通り過ぎてゆく。そうなることを恐れたからこそ「先生」は真実を何枚もの手紙に込めて「私」に託し、自らの時間を止めたのだろう。

木犀の花言葉は真実というらしい。そういう意味で、「先生」はいつだって真実の枝に囲われ見張られながら過ごしていた。「私」は木犀を見る度に、「先生」の薄暗い微笑と、別れと、分厚い手紙の手触りを思い出すのだろう。「先生」との過去は、季節が巡る度、植物を通して「先生」が守ろうとした者たちのこころの底を、じわりと優しく支配する。そうして、秋の来訪を「私」は果たして嫌うだろうか。木犀の小さな花がひらりと落ちる度、枝をへし折りたくなるだろうか。思い出すことは苦痛だろうか。

冒頭の話に戻るが、なぜ、懐かしさは感情を溶かすのか。それは、止められてしまった時間を巻き戻して、温かい日々に出会えるからなのだ。だからどうしても私には、愛おしげに木犀の香を肺にためる「私」の姿を想像する方が、幾分も容易く思われる。

審査講評

漱石作品によく出てくる植物の中からひときわ象徴性の高い木犀に注目し、作品を読み解こうとする姿勢がよい。細部を味わいながら全体と関連づけて読んでいる表れと思われる。

《高校生の部》

紀伊國屋書店賞

精神的向上心とは何か

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年
大内　郁乃

作品名『こころ』
選んだ一行
精神的に向上心のないものは馬鹿だ

明治と平成で時代背景が異なり、そこに生きる人の心のあり方や価値基準も変化しているから、先生とKの生い立ち、性格、書生との関わりなどの情報を道具にして、共感というより類推や想像をして、私はこの話を理解した。その上でKへの贖罪のために自分を追い詰め苦しんだ先生に同情した。「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」は、自分を律しながら生きるKの心を打ち砕く凶器であると同時に、言葉を発した先生自身が残酷で卑怯な人間であると自覚させられる心に刺さった棘だと思った。

しかし、明治の時代を理解するための特殊事情をオフにして読み直した時、先生もKも明治の因習に囚われただけの人ではないかと

思い始めた。先生は親の財産を騙し取られ、Kは幼くして養子に出され、各々人を信じられない事情を持つ。そのせいか、この二人は他人の気持ちを分かろうとせず独りよがりである。Kは先生の恋心に気付かなかったのか。先生はKの気持ちに気付けなかったのか、Kも先生もお嬢さんの気持ちを考えないのか。そして先生はKへの贖罪からお嬢さんに向ける愛情を全うしなかった。結婚はしたが夫婦として心から信頼しきれる関係を築かなかった。お嬢さんは最初から先生を好きでいて、たとえKが割って入ってもその気持ちは変わらなかっただろう。結婚後、先生の態度に不安を感じ先生に色々と問うお嬢さんは、先生とKとの間に起こったことをある程度見抜いていたのじゃないだろうか。先生はお嬢さんを見くびり過ぎていると私は感じる。

「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」を全く別の意味で先生とKの二人に投げたい。たとえ東大を出て優秀な人間であったとしてもまだ社会に出て何者にもなっていない二人にとって、自分の心の中にある倫理観や使命感を絶対的なものと考えるのは滑稽だ。心にある理屈の上に実社会で得た経験を加えて熟成させて初めて、倫理観や使命感が机上の空論でなくなると思う。特に他人との交流により頑なな自分を解放していけてこそ、人生ではないだろうか。本来、お譲さんを愛することで二人は精神的に成長しなければならなかった。人を愛するということは崇高なことだが、二人はその意味が分かっていただろうか。しかも相手のお嬢さんの気持ちを大切にしたと思えない。お嬢さんの家でこれ見よがしに自殺するKも、Kとの関係性ばかり重視しお嬢さんを残して自殺する先生も、精神は子供のままで大人の風格がない。この二人のお嬢さんへの愛は本物なのか疑いたくなる。私は「精神的に向上心がない」二人に喝を入れたい気分である。その一方で色々なことに苦悩しながらも陽気に先生を支え人生を楽しむお嬢さんは精神的にとても大人だと思う。

明治の時代の凜としたイメージの「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉を現代の感覚でとらえた時のギャップをとても面白く感じた。

審査講評

明治時代と現代の時代の違いによる価値観の違いを客観的に分析している。そこから、人間の生き方について考えて行く態度に好感を感じる。

《高校生の部》

新潮社賞

漱石が見た世界

富士見高等学校　2年
山下　珠央

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
「私は硝子戸を開け放って、静かな春の光に包まれながら、恍惚とこの稿を書き終るのである。」

「私は硝子戸を開け放って、静かな春の光に包まれながら、恍惚とこの稿を書き終るのである。」この美しい文で締めくくられたこの本を読み終えてすぐ、私は視線を窓の外に移した。しかし、私の目に映るものは、どこか無機質で忙しなく、漱石が見ていた静寂な世界とはかけ離れていた。私はそう気付いたとき何故だか酷くがっかりした。無論、漱石が生きていた明治の世と今では、見える景色が違うことは理解している。しかし、先刻まで私は確かに漱石と同じ景色を見て、漱石と来客との会話に耳を傾け、漱石の記憶に触れたのだ。そう思わせる程の何かがこの本にはある、私はそう確信した。

漱石の静かな日常が、随想「硝子戸の中」で綴られている。一見淡々としているが、無駄がなく簡潔、かつ静謐で優しく柔らかな筆致で語られるのは、幼少期の不遇な過去、亡くなった母や兄弟の記憶、飼い犬ヘクトーの死、小学校のころの友人との思い出、嘗て交流のあった知人の死など、多岐に及ぶ。刻々と流れる時の中での周囲の人間の死や人々の懊悩を通して漱石は、死生観や彼自身の思想を流麗に語る。「死」というものを主軸に書かれているにも関わらず、時に美しい情景が描写され、時にユーモラスに描かれる三十九個の短編ひとつひとつが、とても愛おしく、温かい。

その中でも特に好きな話を例にあげよう。壮絶な過去をもち、生きることに半ば絶望しかけ、漱石のもとを訪ねて来た女性。そんな女性に別れ際、「そんなら死なずに生きていらっしゃい。」と声を掛ける話だ。真っ正面から生きること、死ぬことに向き合った人の言葉は、こんなにも力強い。そして、女性に向けられた眼差しは優しさに満ちている。その後、この女性がどうなったかの描写はないが、この言葉は少なからず彼女の心を救済し、きっと生きるという道を選んだことだろう。漱石の言葉の力は、絶大だ。言霊は実在するのだなと感じた。

漱石はこの随想を、死の二年程前に漱石山房の硝子戸の中に座って書き記していた。じっと座りながら漱石は、故人を追慕し、厄介な来客との問答、あまつさえ自分の仄暗い過去でさえも、柔らかな

微笑をもって振り返っている。私はそんな「硝子戸の中」を、作家、ではなく一人の人間としての夏目漱石の人生の縮図のように思えてならない。小説を読んだだけでは分からない、漱石の人となりを、生き様を、ひしひしと感じた。国民作家夏目漱石が愛される理由は、ここにある。そうとも思った。

そして、この随想の最後に漱石は硝子戸を開け放ち、暖かな春の光に包まれる。硝子戸の中も、外も、どちらも漱石が生きた世界だ。最後の漱石の言葉で全てが融解し、柔い光が差し込み、そこには一面にただただ静閑な風景が広がる。晩年、漱石が愛した世界が、この一文が、私の胸に強く残った。

審査講評

文章全体が、澄明さと柔かい光に満たされている。「漱石と同じ景色を見て、漱石と来客の会話に耳を傾けて」いたと感じるくらい、筆者が『硝子戸の中』の一篇一篇を大切に読んでいることがよく分かる。

《高校生の部》

早稲田大学賞

鼓動

長野清泉女学院高等学校　2年
海沼　知里

作品名『それから』

選んだ一行

自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に応える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘のようなものであると考えた。

とくん、とくん、どく、どく、どくん。そっと、心臓の音に耳を澄ますとそんな音が聞こえてくる。「生」を存分に蓄えた、留まる事を知らぬ豊かな波が力一杯押し出され、ひたすら前に前に進み、果てしない旅を終え戻ってくる。その繰り返し。生きる者の心臓は皆動く。今、この瞬間も。

「自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に応える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘のようなものであると考えた。」

生は、死によってしかそれを止める事はできない。何らかの形で死を迎えるまで、生き物は皆生き続け、悠久とも、一瞬とも言える時の中でもがきながらも、苦しみながらも生きてゆく。一分一秒と私達は死に向かう。壮大な生の先にあるものは、ただ一つ死、のみである。心臓の、休む事のない働きによるこの音は、まぎれもない生の証拠であると同時に、死の刻印のようにも感じられる。漱石の記したこの一文は、ややこしい言葉や小難しい単語を避け、ただまっすぐに生と死を言い表しているとは言えまいか。命という儚くも強靭で美しいものを、手に取るようにすくいとっていると感じた。

私は昔、心臓の音が苦手だった。夜、布団の上に横になり暗闇に負けないようにギュッと目を閉じると、必ず聞こえてくる心臓の音。どくんどくんという音が、小さな私の体を大波のように襲い力を抜くとさらわれてしまいそうで、ただただ怖かった。心臓の音というのは不思議なもので、生の象徴でもあるように死の権化でもあるのだ。今でこそ心臓の音に震えながら眠る事は無くなった。だがふっと気を抜いた瞬間に、鼓膜で鼓動が鳴り響き、捕え処の無い世界に放り無げられた心地になる。時間に縛られ、常に急いて焦りながら暮らす現代の人々は、心臓の音など気にもしないだろう。世の中の時間の流れは多種多様な人間を飲み込む程強大で、抗う事は不可能な気さえしてしまう。でもそんな時、永遠の母とも思えるこの心臓に手を置き、自らしか刻む事のできない鼓動の生み出す波にぷかんと浮かび、たゆたってみる。鼓動こそが、自分の本当の時である。私にしかない、あなたにしかない時を、存分に味わいたいではないか。私達は、命を持っているのだから。

生は、死によってのみ輝く。いつか、この鼓動が止まる日がくる。だが、私達は本当の意味では死なない。肉体は朽ちるが魂は至る所に根付き受け継がれていく。漱石が残したこの文章で、現代の私が揺さぶられたように。だから、死を恐れずこの鼓動が続く限り自らの生を全うしたいと思う。流れる命を掌で抑えながら。

審査講評

かつて、布団の中の筆者を怖がらせていた「心臓の音」、その記憶を克明に書くことで『それから』の一行描かれた「生」と「死」のイメージが、見事に喚起されている。

《高校生の部》

佳作

人間のこころ

東京都立日比谷高等学校　2年
井上　美穂

作品名『こころ』
選んだ一行
私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。

先生の遺書に並べられた言葉は、どれも重く、私のこころにずっしりとのしかかってきた。その中でも特に私のこころに刺さった言葉がある。それは、「私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。」という一文だ。

先生のこころの底には、いつも人間不信の念があった。実父があれだけ褒めていた叔父ですら、財産の話になったら悪人へと変貌してしまったのだ。先生は、自分のことをだました叔父を憎み、世の中に信用できるものなどない、と考えたのだった。そして、自分は善人で、決して悪人にはならないと思っていた。しかし、そんな自分も友人Kを裏切り、自殺に追い込んでしまったのだ。あれだけ憎んでいた叔父と自分は、結局のところ何も変わらなかったのだ。自分は叔父とは違ってりっぱな人間である、という信念が壊され、先生は絶望した。先生はこころの中で、ずっと人間の罪というものに苦しんできた。

そもそも、人間とはそこまで清廉潔白な生き物なのだろうか。たとえどんな善人だとしても、ふとした拍子に悪人に代わりうる存在、それが人間の姿なのではないか。人間は、正義感を持ちながら、こころのどこかには嫉妬したり自分を正当化したりする醜い感情も持ち合わせている。他人を傷つけずに生きられる、完全な人間など存在しないのではないか。しかし、先生のこころを苦しめる人間の罪という言葉には、一度罪を犯してしまった人には、もはやその罪を償うだけの権利すらない、という重い響きが込められている。生きている限り罪を償いたくても償えない、という葛藤は、やがて先生のこころを自殺へと導いていくのである。

先生が自ら命を絶つときの唯一の希望は、妻に自分が犯した過去を悟られないことだった。妻のことさえも信じられなかった先生だが、自分の死後も妻には幸せでいてほしいという思いからは、こころの底から妻を愛する気持ちとこれ以上誰も傷つけたくないという切ないまでの決意を感じた。これが、先生のできるせめてもの償いの形だったのかもしれない。

先生は、人間の罪というものに苦しめられ、最後には自殺を遂げた。死ぬ前にたった一人でいいから、ひとを信用して死にたいと思

っていた先生。孤独な先生の人間性に強い関心を抱き、まじめに先生の人生から教訓を受けたかった「私」。先生が最期にこころの内を「私」にだけ打ち明けることができたのは、死を覚悟した先生にとっては「私」の存在が最後の光だったからではないだろうか。

先生のこころの中が吐露された、先生の遺書。その遺書は、若い「私」に残す人生の教訓という意味だけではない。友人Kに対する、深い闇に閉ざされた懺悔の気持ちが込められた遺書だ。先生の暗い過去の告白は、読者である私のこころに人間の本性とは何かという問いを突きつけた。

《高校生の部》

佳作

先生に一言！人間は弱さとともに生きるものだ！

大妻高等学校　2年
後藤　萌那

作品名『こころ』

選んだ一行

私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて遺りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまって置いて下さい

「私は妻には何にも知らせたくないのです。」この一文が目に飛び込んだとき、最期の最後まで、先生は勝手だなあと思った。続く「妻が己の過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて遺りたい」から、先生の妻に対する愛情を感じつつも、「妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡

てを腹の中にしまって置いて下さい」に、「私」への絶対的な信頼と、先生のいろいろなものに対する臆病さを感じた。

先生は、Kという（かけがえのない）存在を、自殺という形で失った経験がある。このことが、その後の先生の人生に大きな影響を与え、「私」が先生に惹かれる要因の一つにもなったところである。にもかかわらず、自分も同じ方法で人生を終えることを選んだのは、なぜか。私は二つの結論に至った。

一つは、先生の弱さ、人間の弱さが、自分を変え、現状を打破しようとする気持ちより強かったのだろうと、私は考える。

人間は、そう簡単に変わることができないものなのだろうか。そんなことはないと、私は信じたい。変わるということは、変身することだけではないと思いたい。あきらめということも、変革のひとつとして考えてもいいのではないかと、私は思う。

あきらめというと、後ろ向きのイメージを抱くかもしれないが、区切って仕切り直すということも、あきらめの一種として考えてもいいのではないかと思う。

もう一つは、絶大な信頼を寄せている「私」に告白し、命を絶つことで、懺悔できると考えたのではないだろうか。ちょうど、明治という時代が終わることと相まって、なおさらそんな妄想を抱いたのではないだろうか。

しかし、先生に信頼を寄せている「私」に対して、最期まで頼りにしすぎではないだろうか。「私」は、先生の思うとおり、守り通せるのだろうか。先生を慕い、後に残された「私」に対して、先生の死がどういう影響を与えるかということには、思い至らなかったのだろうか。

「私」に対して、先生の自死を以て、人生の複雑さを学ばせようとしたのだとすると、それは誤っていると思う。人生の複雑さは、先生が生きる姿を見せることで、永遠に示さねばならなかったのではないかと思う。

人は誰しも弱い者であり、その弱さが、いつ露呈するかは、誰にもわからない。一生、出ない人もいるかもしれないし、しばしば出る人もいるかもしれない。かくいう私も、弱さが全面に出た時期があった。

しかし、私は、そこから一歩踏み出せた。それを勇気というかもしれないが、私は、あきらめと捉えている。私にとっては、大きな壁を一つ乗り越えられたが、いつ、また弱さが私を支配するかはわからない。人は弱さとともに生きるものなのかもしれない。

《高校生の部》

佳作

漱石とわたし

共立女子高等学校　2年
辻ヶ堂　清香

作品名『こころ』
選んだ一行
妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙を流しても私の罪を許してくれたに違いないのです。

「夏休みのある日、祖父に原稿用紙の束を渡された。漱石マニアの祖父は、漱石が通っていたといわれる「相馬屋」という文具屋で買ってきたそうだ。わたしは幼少期を神楽坂で過ごしたこともあり、わたしにとってもはや歴史上の人物である漱石と同じ道を歩いたかもしれない期待と興奮から、この原稿用紙にペンを入れたく、「こころ」を手に取った。

〝文学〟それは、人間の〝心〟の奥底までを探求し描くことを永遠のテーマとしている。いつか祖父から聞いた言葉だ。この作品はまさに、この永遠のテーマを真正面から捉えようとしているだろう。

先生は、「妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。」とわかっていたのに、一人で苦しみを抱えていた。妻に真実を打ち明けることができていたなら、先生は自殺に至らなかったのではないか。またKが恋心を打ち明けたとき、先生もまたしまい込んでいた心底の重荷をKと共有できていたなら、先生が一生付き合うこととなる罪悪感も生じなかったのではないか。先生は江戸にも平成にも見ない〝寂しい人間〟の象徴といえよう。最も親愛している妻ですら〝暗い光〟の存在なのだ。しかし、「嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いない。」と明言できるほどの存在がわたしにはいるだろうかと考える。

わたしには親友と呼べる存在が一人いる。彼女とは今までほぼ喧嘩もしたことがなかったが、先日わたしのとある不注意な言動をいつになく厳しく注意された。わたしはすごく嫌な気分になったが、彼女も嫌な気分だったと思う。はっきり言ってくれたことでわたしも大いに反省し、互いに良い気持ちで仲直りできた。今のわたしたちなら、受験などの辛い壁も乗り越えられる気がする。

先生は孤独を生きる中で、奥さんを愛していた。人間は人をたった一人失っただけでこんなに変わるものかと疑問を口にしていた彼女は、ついにその答えを知ることはない。彼女は悲しみに暮れるだろう。私もまた先生がいなくなった悲しみに暮れるだろう。そこで、妻と悲しみを共有してほしい、互いに一人で抱え込み自分と同じ過

ちを犯さないでほしい、苦しみは共有することで半減するのだから。そんなメッセージが遺書に込められているのではないか。先生が見つけたたった一人の人間は、妻ではなく私だった。先生は間の悪い不器用な人間だ。やっと私に過去を物語りたいと思ったとき、私は東京に出られない状況だった。最後まで不器用な先生の裏切りにまみれた人生は、私を裏切ることはなかっただろう。

わたしは、高校生の今、そんな大切な存在に一人でも出会えていることを幸せに思う。記憶にないほど幼い頃歩いた神楽坂通りを、漱石の文学を精読できる高校生になった今、また歩いてみよう。

《高校生の部》

佳作

「百年はもう来ていたんだな」

暁星高等学校　2年
佐宗　隆太

作品名『夢十夜』
選んだ一行
「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気が付いた。

「『百年はもう来ていたんだな』とこの時初めて気が付いた。」これは『夢十夜』の第一夜の最後の一文である。私は、『夢十夜』を以前にも一度読んだことがあったのだが、改めて読んでみるとより一層心に残る一文であった。

夢の中で、「輪郭の柔らかな瓜実顔」をした女は「もう死にます」と告げる。そんな到底死にそうには見えない女は、「百年待っていてください」と「自分」に言う。死んでしまった女を前に「自分」が出来ることはただ待つことのみである。ひたすらに待ち続けて、「女にだまされたのではなかろうか」と思ったその時、「自分」の方へ向いて伸びてきた青い茎の蕾から、一輪の真白な百合の花びらが開く。その花びらに接吻し、遠い空にたった一つ輝く暁の星を見て言った言葉が、「百年はもう来ていたんだな」なのである。

この時、「自分」はどのような感情を抱いたのだろうか？嬉しさ？寂しさ？私は「安堵」だと思う。女は、自分が死ぬのだと分かった時「自分」に百年待っていてくれと頼んだ。本当に、「百年」という気が遠くなりそうな時間ずっと「自分」が待ってくれるのか、それで愛を確かめようとしたのではないのだろうか。そして途方もない年月が過ぎたとき、「真白な百合」となって女が再び現れる。この瞬間に二人の愛は完成したのだ。本当に逢いに来るのか信じがたいような女の願いを信じて待ち続けた「自分」は、その時安堵したのだろう。「やっと百年がたった」「本当に逢いに来てくれた」、

そして「二人の愛は本物だった」と。作中で鍵括弧のついた「自分」の言葉は、この「百年はもう来ていたんだな」が最初で最後なのだ。これまで女の言うことを信じて従い続けた「自分」の言葉。その言葉の深遠さをこの一文から感じ取ることが出来る。

この文章は終始不思議な世界観を保っている。すべての文に意味があり、不思議な美しさが感じられるように思える。その理由は、夢の中の物語だからだ。夢の中では不思議なことがたくさん起こる。だからこそ、実際には起こらないような現実世界での願いが夢の中の話となって現れたりするのだろう。この物語でも、実際に百年の時が過ぎていたのかはわからない。しかし、「自分」が女を信じて待ち続けていたことにより、愛を実感することが出来た。夢がそのような終わり方を迎えたのは、夢を見た本人の、人を信じることへの不安が表れていたからではないだろうか。そして、「百年はもう来ていたんだな」と気が付くことによって、夢の中の世界から引き戻されたのだ。

《高校生の部》

佳作

悪くなること

東洋女子高等学校　3年
山口　叶

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
考えてみると世間の大部分の人は悪くなることを奨励しているように思う。

私は、夏目漱石の『坊っちゃん』から「考えてみると世間の大部分の人は悪くなることを奨励しているように思う。」という一行を選んだ。なぜなら私はこの一行にひどく共感したからである。

私も世間の大部分、つまり社会は悪くなることを奨励しているように感じる。本当に悪くならなければ、とまではいかないが正直者のまま生きて社会で成功するとも思えない。悪い意味で賢くなるのだ。これは、悪くならなければ社会に成功しないものと信じている子供が悪いのではなく、社会全体に問題があると考える。

私は「坊っちゃん」の学校と今の社会は似ていると感じた。人の

力に嫉妬する者、誰かを蹴落とそうと謀る者、上司の機嫌をとる者など、たくさんの人が集まる坊っちゃんの勤め先は、まさにどこにでもある社会だった。そんな中でも正直者で居続けた坊っちゃんの考え方は悪くならなければ社会に成功しない、と周りに教えられながらも悪くなりたくない、正直なままでいたい、という人ががむしゃらにただひたすらまっすぐに正直に居続けているように感じた。

「正直者は馬鹿を見る」という言葉があるが、「坊っちゃん」で出てくる坊っちゃんや山嵐はたくさん苦しい思いをするが最後は幸せになってほしい、と読者が思うような人物だった。少なくとも私はそう思った。読んでいてそう感じる人が多いのではないだろうか。正直者が馬鹿を見る回数は確かに多いかもしれない。正直を利用しようという人達なんてたくさんいる。そんな人たちから苦しい思いをさせられ、社会の理不尽さに納得できないことも多いだろう。ただ、その分幸せになるだろう。そういう人の周りに集まる人はきっといい人たちばかりが集まると信じたい。坊っちゃんに、清や山嵐がいたように。

ただ、悪くなることを奨励している社会で悪くならないというのはとても難しいことだと思う。私は、今回選んだ一行にとても共感し、悪くなりたくないと思ったがそれは本当に難しくて、苦しい思いをするのだろう。ただ、それでも悪くならない人たちが幸せになれる社会ができればいいと思った。正直者が馬鹿を見ない社会になれば人はいい人のままでいられるのだろうか。

いい人というのがどのような人かは個人の価値観による。私は坊っちゃんのようにただただまっすぐな正直者でいたいわけではない。正直は悪いことではないが、まっすぐすぎる正直はいつか人を傷つけてしまうようにも思う。私は誰かに寄り添える人になりたい。人を思いやりそっと寄り添える人が私の思う悪くない人である。私はそういう人になりたいので将来、養護教諭を目指している。

《高校生の部》

佳作

暗示

水城高等学校　1年
関根　康太

作品名『夢十夜』

選んだ一行

自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかったとはじめて悟りながらしかもその悟りを利用できずに、無限の後悔と恐怖を抱いて黒い波の方へ静かに落ちていった。

この一行が含まれている夢十夜の第七夜は漱石自身の外国へ行った時の体験と重なっているように思える。そのような第七夜でこの一行は、行き着く先もさだかでない人生そのものを表しているようで、一番印象深かった。

「どこへ行くのかわからない船」とは、何を暗示しているのだろうか。明治時代の日本は、欧化政策真っただ中で、その日本の行き着く先の不透明さを言っているのか。それとも、漱石自身、これからどうすればよいのか迷っているのか。あるいは人生そのものの目的地がわからないことを言っているのか。いずれにせよ、行き着く先の分からない不安や恐怖が、その言葉の裏に潜んでいるように感じる。

この一文で主人公は、船から飛び降りたことに関して、取り返しのつかない後悔を抱いている。船から飛び降りることを選んだ主人公は、なぜ後悔しているのか。「後悔」には二種類ある。やってみてから生じる後悔と、やらなかったことで生じる後悔だ。この二つはともに共生することはない。そして今回は前者の「後悔」である。海へ飛び込んで初めて、死にたくないと思ったのだろう。ところで、主人公が死のうと思った動機は、目的のない退屈さ、つまらなさだった。

ロシアの著名な小説家ドストエフスキーはシベリアで強制労働をさせられた体験から、もっとも残酷な刑罰は、「徹底的に無益で無意味」な労働をさせることだ、と「死の家の記録」に書いている。監獄では、受刑者にレンガを焼かせたり、壁を濡らせたり、畑をたがやさせたりしていたという。強制された苦役であっても、その仕事には目的があり、働けば食糧が生産され、家が建ってゆく。自分の働く意味を見出せるから、苦しくとも耐えることができたという。このことから、目的や目標、つまり、向かうべきところがあることの重要性がわかる。目的のない人、は時として死をも選ぶということが書かれている。

最後に、「無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちていった」とある。「無限」という表現によって、「黒」の世界への底知れぬ恐怖がより一層引き立てられているのが、この文の面白さであり、結末を現している。

この一行から、人生においての向かうべき方向を定めること、目標を作ることの重要性を学んだとともに、漱石の高度な暗示テクニックに感動した。この学びから、これからは目標をきちんと決めて行動していきたい。

《高校生の部》

佳作

名前のつかない自分

長野清泉女学院高等学校　2年

笹辺　有紗

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

他人のできぬことを成就するのはそれ自身において愉快である。

「他人のできぬことを成就するのはそれ自身において愉快である。」

この一行が私に教えてくれたものは大きかった。本という、いくつもの言葉で、文章で構成されているものの一部にすぎない一行にここまで考えさせられたことはないと思う。語り手である「猫」の言葉だ。この「猫」はこの一行にそんなに思い入れがないかもしれない。ただ自分を鼓舞するために言った言葉だ、と。他の人もそう思うかもしれない。

しかし、私にとっては違った。私にはこの一行は私に言ってくれているように思えたのだ。

私にはこれといって特技がない。周りの人間を見ていると、尚更そう思うのだ。長所など聞かれてもすぐに答えることができない。勉強だって、そんなに出来るわけでもない。私は人にないものを持っているのだろうか、と良く考える。

だが、この「猫」だって、見る限りでは普通の猫である。餅が口から離れてくれずに焦り、踊り狂っているように見られ、笑われ怒られあきれられる猫である。それがこの「猫」である。

しかしこの「猫」は、他の猫だって出来るであろう「忍び込む」ということを「他人にできないこと」とし、それを成就するのが愉快だと言う。自分はこんな人間達よりもこんなにできることがあるんだと、自信を持っている。

私はそれがすごくかっこいいことだと思った。自分の考え次第でどうにだって変えられる。それを私の中にスーッと入ってきたこの一行を通して、「猫」が教えてくれたのだ。「自分には特技がない」と決めつけて、特技を殺しているのは私自身であると気付かせてくれた。

これから先の未来、私にはたくさんの選択が迫ってくる。その度に私は、「私には並外れたことができないから」「私より他の人の方ができるから」と思ってしまい、正しい選択ができなくなることがあるかもしれない。

しかし、自分の限界を決めて、自分の特技や長所を殺してしまう

ようなことはやめて、自分に自信を持って、前だけ向いて進んでいきたいと思う。その道中で、自分の強みが見つけられると良い。この「猫」のように、突然やってきて、教えてくれる何かが現れるかもしれない。あるいは、先に自分で見つけられるかもしれない。未だ名前のつかない自分と、これからも向き合って歩いていこうと思う。

《高校生の部》

佳作

人間らしさとは何か

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年

松浦　光希

作品名『こころ』

選んだ一行

その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。

この一行は、Kが「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」と言った直後のことを先生が話したものです。この一行を選んだ理由は、この一行の意味がどうしても私にはしっくりとこなかったからです。だから、私なりのこの言葉の解釈を述べたいと思います。

ここで言う「人間らしさ」とは、「自己を知り尽くすこと」だと考えます。先生は、御嬢さんへの恋心をうまく操れないことや、叔父に裏切られたことで、自分を責め続けています。それに比べてKは、自分の考えを強く持ち、決して簡単には物事を諦めない性格です。先生は、Kに嫉妬し、自分がKより弱い人間であることを自覚していました。そのうえであえて抽象的な「人間らしい」という言葉を使ったのです。私には、この言葉は逃げているように思えました。聞こえのよいこの言葉は、人それぞれの考える意味によって異なり、とても奥深いものです。親友であるはずのKとうまく話すことができないことに苦悩する先生は、まるで人間の弱さを体現しているかのように思えます。そしてKは、それを見抜いたかのように応答しました。自己を理解して表現できる能力は、多くの生物の中で、人間のみにしか備わっていないものだと思います。先生は「人間らしい」という言葉を軽々と使ったのに対し、自己の意志が生きるうえでとても大切なことであると考えるKは、この言葉を重く受け止めたのだと思います。自己を知り尽くすことは、同時に自己の弱さを知ることにつながるのです。

その点において、私は、自分のことを「人間らしい」と思います。私は、どんなことに対しても自分なりの意見をもつことを大切にし

ていて、それを他人に伝えることも常日頃から心がけています。しかし、他人からの相談事になると、相手のことを無駄に気遣いすぎて、自分自身の考えをストレートに伝えられないことが多々あります。これは私の弱さです。でも私はそんな自分の弱さを知っています。だからこそ、その弱さを直そうと意識して過ごしています。

人間は、何か問題があると、それを何とかして直そう、と様々なことを考えます。私はその「何とかして直そう」という感情をもつことこそが、真の「人間らしさ」なのではないか、と思います。ある問題が起きたときに解決しようという感情そのものが向上心であり、向上心を持つこと自体が「人間らしい」といえるのではないでしょうか。つまり、Kが「馬鹿」と表現した人間は、「人間らしくない」人間、と言い換えられるということです。たとえ理想論を唱えたとしても、私たち自身が人間なのだから、「人間らしさとは何か」という問いに明確な答えはありません。だから、私はKに、私なりの答えとして、「人間らしさ」は弱さがあるからこそ存在するものである、とだけ伝えたいです。

《高校生の部》

佳作

日本の文化のあり方

福岡雙葉高等学校　2年
越智　友梨佳

作品名『夢十夜』
選んだ一行
遂に明治の木には到底仁王は埋まっていないものだと悟った。それで運慶が今日迄生きている理由も略解った。

日本には新たな文化を創造する力はあるのだろうか。文化を創るためには、その土台となる下地のような年輪が必要になってくるのだと思う。「明治の木」になかったように平成の「木」の中には「仁王」は埋まっていないのではないか、と私は思っている。夏目漱石の嘆きや憂いのようなものは、現代、より深刻なものとして目の前にあるのではないか。

今の日本は次々と新しい、利便性の高いものが求められ、そして作られている。そうした中で、人々の価値観も多種多様となり、ある意味、絶対的なもの、意義あるものとしての文化は定着できなく

なっているのではないかと思われる。一時は認められてもそれは長続きすることはなく、まさに流行り廃りのサイクルは目まぐるしく、短時間の中で交代してしまう。「ああ、それあったね。」というレベルのものは、文化とは呼べない。

逆に今ある「日本の文化」と言われているものの多くは、まさに明治以前のものである。しかしその多くは現在、どれほどの人にその価値を認められているのだろうか。その専門家の人や一部の愛好者が格式を高くし、あるいは学者の方が伝統としてその価値を高らかに訴えている。その一方で多くの「若者」たちはそっぽを向いている。このような状況下で存在しているものは、伝統芸能ではあっても文化ではないと私は考える。

それでは文化とはどのようなものなのだろうか。私は「木」の年輪のようなところから生まれるもの、その魂や漱石のいう「精神」から生まれるものなのだと思う。具体的にはその土地や国の育んできた心のようなもの、習慣や長い時間をかけて作りあげていくものである。江戸時代は鎖国によって、それ以前も日本は海に隔てられていることによって、ある意味独特の文化を創ることが出来た。漱石の時代は、そうした日本の環境が壊れ、大きく変化した。他国からの文化が日本の価値観を凌駕してしまったのである。現在の日本は、他国からの影響が多く見られる反面、日本独自のもの、文化は探さなければ見つからないほどに乏しくなってしまった。

そうした中で日本は、改めて文化を創造することが出来るのであろうか。文化が、長年培われたところ、魂から生まれるものであるならば、現在の日本はそうしたものを失い、よりどころを失い、彷徨っているような状態である。だから多くの日本人は、あるいは「若者」は、自信が持てないのではないだろうか。時代はグローバルな世の中となり、ますます多国籍なものが流れ込んで来ている。その中で「文化」を持たず、日本人としての自覚さえも見失った「若者」が果たしてどのようなコミュニケーションをとることが出来るのであろうか。それともっと広い視野、例えばアジアであるとか、日米であるとか、さらには地球という観点で生きていくことになるのであろうか。私には全く見えてこないのである。

《高校生の部》

佳作

こころと、血と、私の人生

福岡県立小倉高等学校　2年
成友　快

作品名『こころ』
選んだ一行
私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

こころに手を当てて下さい。そう言われて、人はどこに手を当てるだろう。こころが人間の精神作用のもとになるもの、または思慮のことを指すのなら、こころの所在は専ら脳であって然るべきで、手を当てるところは頭でなければならない。しかし、人はこころの場所を心臓のある胸にもとめている。こころとして手を当てるところは胸、そして心臓以外にないのである。

「私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。」

先生の遺書の冒頭にこんなくだりがある。読んだ時には、あまりにも生々しい、強烈な比喩だと思った。しかし、次第に最も的を射た形容であると感じるようになった。

先生のような経験をしたことがある人はほぼいないだろう。叔父の裏切り、恋、親友Kの死。どれもが壮絶なものだった。ただ、先生のような経験ではないにしても、誰しも人生の経験はある。その経験が他人の役に立つことを考えたことはあるだろうか。

こころを心臓にもとめたとき、心臓によって流されている血はその人の人生を表すものであると思う。以前、「私」という青年は血を浴びる決心を自分から先生に伝えていた。だからこそ、先生は血という自分の人生そのものを青年の顔に浴びせかけることによって、最後の役割を果たそうとしたのではないか。

青年にとって遺書を読んだことは先生の人生を背負うこととなった。知るということには責任が生じる。それは先生にとっても同じことで、青年がこのこころをさらけ出すに値する人間でなければいけなかった。出会いは青年の先生に対する言わば一目ぼれから始まった事であるが、運命的な関わりによって先生は見事にその人を摑んだのだった。無論、先生に他人に人生を預けよう気持ちがあったかどうかはわからないが、自分の命がなくなった時も、この経験を無駄にはしないという信念は知る事ができる。

先生は青年に対し、「あなたは自分の過去を持つには若過ぎた」と言っていたように、今の自分には過去を預けるような人もいないし、その過去もない。ただ、これから起こる、自らの経験となる事柄と、それに際した自分の思慮を無駄にしたくはない。できることなら他人に命を宿すようなものにしたい。そんな価値のある人間になれるのか、伝えるに値する人は現れるのだろうか。それは、ずっと先の話になるだろう。私の心臓はまだ破くには若過ぎて、血も少ないからである。

「読書感想文　選んだ一行
惜しくも入賞を逃した読書感想文の選んだ作品と選んだ一行を掲載します」

《中学生の部》

田園調布学園中等部　2年
作品名『こころ』
選んだ一行
　私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

日本女子大学附属中学校　1年
作品名『吾輩は猫である』
選んだ一行
　『呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする』

日本女子大学附属中学校　1年
作品名『こころ』
選んだ一行
　「私は淋しい人間です」

日本女子大学附属中学校　1年
作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　清はおれの事を慾がなくって、真直な気性だと云って、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。

新宿区立新宿西戸山中学校　2年
作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑として、留まっていられると思っていらっしゃるかもしれないが、私にはそんな不人情なことはできません。」

新宿区立新宿西戸山中学校　2年
作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。

大妻中学校　1年
作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
　いえ、ちっとも心配じゃありません。こんなことが毎晩あっても、命のある間は心配にゃなりません。授業はやります、一晩くらい寝なくったって、授業ができないくらいなら、頂戴した月給を学校の方へ割戻します

大妻中学校　1年

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
人があやまったり詫びたりするのを、真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだろう
大妻中学校　1年
作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
赤シャツも野だも訴えなかったなあと二人で大きに笑った
豊島岡女子学園中学校　2年
作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
俺は泣かなかった。しかしもう少しで泣くところであった
豊島岡女子学園中学校　2年
作品名『夢十夜』
選んだ一行
日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、あなた、待っていられますか
豊島岡女子学園中学校　2年
作品名『夢十夜』
選んだ一行
無限の後悔と恐怖を抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行った。
豊島岡女子学園中学校　2年
作品名『夢十夜』
選んだ一行
星の破片は丸かった。長い間大空を落ちている間に、角が取れて滑かになったんだろうと思った。
成城中学校　2年
作品名『夢十夜』
選んだ一行
ただ背中に小さい小僧がくっついていて、その小僧が自分の過去、現在、未来を悉く照して、寸分の事実も洩らさない鏡のように光っている

《高校生の部》
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年
作品名『こころ』
選んだ一行
先生は庭の方を向いて笑った。
長野清泉女学院高等学校　2年
作品名『夢十夜』
選んだ一行
自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗ってい

る方がよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行った

長野清泉女学院高等学校　2年

作品名『夢十夜』

選んだ一行

「百年、私の墓の傍に坐って待っていてください。きっと逢いに来ますから」

鎌倉女子大学高等部　2年

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

頭の上には天の川が一筋かかっている

北鎌倉女子学園高等学校　2年

作品名『虞美人草』

選んだ一行

「ある人は十銭をもって一円の十分の一と解釈する、ある人は十銭をもって一銭の十倍と解釈する。同じ言葉でも人によって高くも低くもなる。」

水城高等学校　1年

作品名『夢十夜』

選んだ一行

おれは人殺しであったんだなと気づいた瞬間に、背中の子が急に石地蔵のように重くなった。

明治大学付属明治高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです

渋谷教育学園渋谷高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう

福岡県立小倉高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉しそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

福岡県立小倉高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

平生はみんな善人なんです、少なくともみんなふつうの人間

なんです。それが、いざというまぎわに、急に悪人に変わるんだから、恐ろしいのです。

福岡県立小倉高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

「しかし、腹の底では世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気がした事もよくありました。」

渋谷教育学園渋谷高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。

都立調布北高等学校　2年

作品名『こころ』

選んだ一行

「奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。」

掲載は順不同です。

絵画コンクール

どんな夢を見た？
あなたの「夢十夜」

小学生低学年（1・2・3年生）の部

最優秀賞 …… 68
優秀賞 …… 69
朝日新聞社賞 …… 70
紀伊國屋書店賞 …… 71
新潮社賞 …… 72
早稲田大学賞 …… 73
佳作 …… 74

小学生高学年（4・5・6年生）の部

最優秀賞 …… 82
優秀賞 …… 83
朝日新聞社賞 …… 84
紀伊國屋書店賞 …… 85
新潮社賞 …… 86
早稲田大学賞 …… 87
佳作 …… 88

最優秀賞

タイトル

クラゲのひるね

新宿区立早稲田小学校　２年　山本　惟織

説　　明

海にぷかぷかうかぶクラゲを見たら、まるでお昼ねをしているみたいでした。クラゲさん、どんなゆめをみているのかなぁ。ぼくもクラゲになって、海でお昼ねしたいです。

審査講評

クラゲの透明感が出ていて、白色が輝いている。
クラゲの昼寝というテーマも良い。

優秀賞

タイトル

ぼくはサムライ

新宿区立大久保小学校　２年　滝沢　太郎

説　　明

戦国時代のいくさに勝った夢を見たい！！

審査講評

造形、色、構図が決まっていてそのままポスターに出来るような作品。

朝日新聞社賞

タイトル

2年2組と山のおにぎり

東京学芸大学附属世田谷小学校　２年　立澤　樹

説　　明

私は高尾山に向かう電車に乗っていました。不思議な事に次の駅に着く度に、友達が一人づつ乗ってきて、気がつくとクラス全員が乗っていました。みんなで山頂に着くと、お弁当を持っていたのは私だけ。山の妖精がおにぎりを大きくしてくれたので、みんなで食べました。これが私の見た夢です。

審査講評

一人ひとりが表情豊かで、みんなで楽しそうに食べている様子がよく表現されている。

紀伊國屋書店賞

タイトル

月夜の馬

荒川区立峡田小学校　２年　森　美彩紀

説　　明

くらやみのなかでひかるメリーゴーランドとそのうまをうつしだすきれいなゆめ。

審査講評

絵本になりそうな、淡い色使いが良い。

新潮社賞

タイトル

あくまの目

新宿区立四谷小学校　３年　山口　晴

説　　明

ゆめをみたときに５つの目がでたから。

審査講評

型にはまらぬ色合い、タッチが凄味を生んでいる。将来が楽しみ。

早稲田大学賞

タイトル

花火

熊本市立古町小学校　２年　太田黒　美空

説　　明

花火からダイヤがふって、夢の中の鳥がふるえて喜んだり、かがやいています。

審査講評

卓越した発想力と独特のタッチを感じる。

佳作

タイトル　ホットケーキの上で

新宿区立落合第一小学校　2年　安藤　虎之介

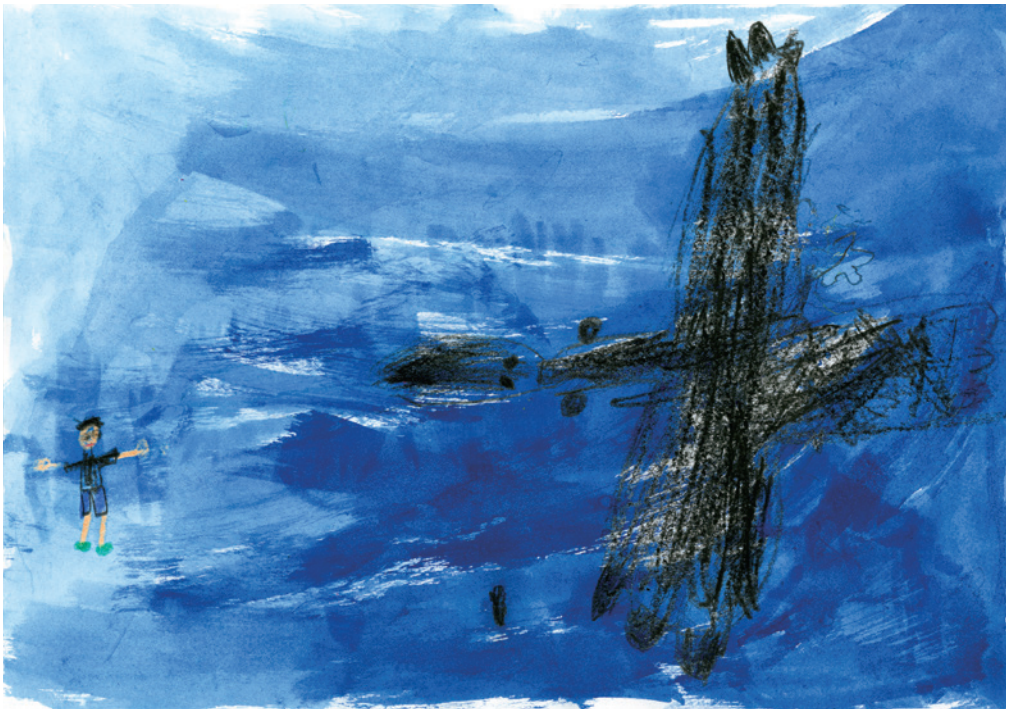
説明

ふわふわでおいしいホットケーキの上で、ゆっくり昼ねするゆめが見たいです。おきたら少したべて、また昼ねしたいです。バターがまくらです。

タイトル　天国の神さまたちのおまつりだ

新宿区立淀橋第四小学校　2年　加藤　工朔

佳作



タイトル

からすにおいかけられたゆめ

新宿区立淀橋第四小学校　2年　松本　賢大

タイトル

夏のよる

新宿区立西新宿小学校　1年　加賀　春衣

説明

夏休みに群馬県へ行った時、夜空を見上げたら星で空がいっぱいになっていてきれいでびっくりしたので、夢の中でも星空を見たいと思ったからです。

佳作

タイトル 本の世界

暁星小学校　1年　土屋　昌輝

説明

本を読んでいたら、本の世界にいってみたくなりました。ぼくは、恐竜です。

タイトル 京都のホテルにとまったよ

筑波大学附属小学校　3年　首藤　琉花

説明

クラスのみんなと京都のホテルにとまった。そこで友だち３人ともんだいをだしあったり、プールできょうそうしたりした。

佳作

タイトル　ロボットと私

日本女子大学附属豊明小学校　1年　二上　栞

説明

すごい面白い話を聞いたから、ロボットの目から虹のビームが出た。

タイトル　レゴの夢

桐朋小学校　2年　譲原　大悟

説明

レゴがまわりにたくさんあって、うれしくて作品をたくさん作りまくった夢。

佳作

タイトル　ぼくと漱石さんのマッチ箱列車の旅

川崎市立栗木台小学校　3年　佐々木　信一良

説明

漱石さんと一緒に旅をして色々な作品の話をゆめの中でしてみたくてこの絵を書きました。

タイトル　えからとびでたきょうりゅう

安芸太田町立戸河内小学校　1年　新宅　陽樹

説明

ぼくが描いたきょうりゅうの絵がほんもののきょうりゅうになるゆめです。

佳作

タイトル　ドラゴンにのったぼく

松山市立生石小学校　2年　越智　悠斗

説明

ドラゴンにのってうみをとびまわる。

タイトル　夢十夜

松山市立北久米小学校　3年　山本　彩瑛

説明

私がみた夢を絵にしました。

佳作

タイトル　ふしぎなふしぎなふしぎまほう

高松市立太田小学校　2年　下田　himea

説明

まん月の夜、わたしは海のおしろに行った。そこでは海のいきものがつかまっていた。わたしはおばあちゃんから教わったじゅもんをとなえてみんなをにがした。りんごや星が空からおちてきてきれいな海にもどったのです。めでたし。めでたし。

タイトル　花火大会

熊本市立古町小学校　1年　村元　明莉

説明

熊本市総合体育館で花火とホタルを習いました。クレパスと絵の具を使いました。

最優秀賞

タイトル

夢

新宿区立落合第四小学校　6年　村尾　伊織

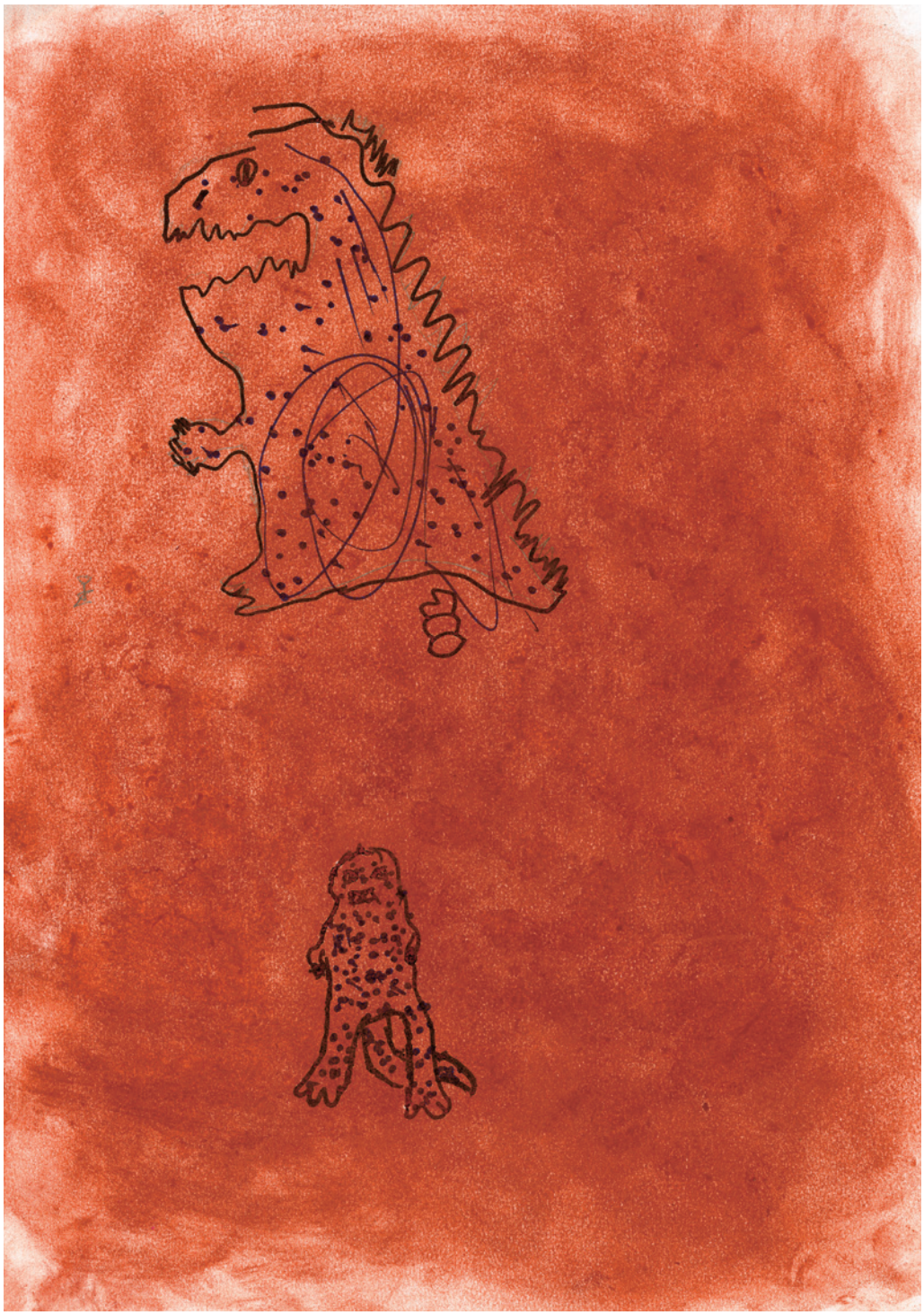
説　明

自分の見た夢。

審査講評

黒とピンクのインパクトがあり、うごめくような色使い。完成を見通して描いている構成力が素晴らしい。

優秀賞



タイトル

ゴジラ

新宿区立戸塚第三小学校　４年　岡田　雄斗

説　　明

ゴジラに街をこわされてしまった。街がぼろぼろになったしゅんかんに起きました。

審査講評

一筆書きのゴジラに、存在感がある。説明と絵が一体となっていておもしろい。

朝日新聞社賞

タイトル

虹の鯨

新宿区立西新宿小学校　４年　内山　神衣

説　　明

虹色の海に虹色の鯨と仲間がいる夢を見たいです。

審査講評

小学生離れした作品。自分の絵が確立しているように感じる。

紀伊國屋書店賞

タイトル

はばたけ夢の鳥

玉名市立横島小学校　５年　水島　悠月

説　　明

夢の詰まった「夢色」の鳥に乗ってにじをくぐってみたり、きれいな風景を見たり世界中を旅する夢を見たい。

審査講評

非常に丁寧に作られている、美しい色合わせの作品。

新潮社賞

タイトル

ゆめの中でそう石先生と話している

新宿区立早稲田小学校　４年　大澤　英恵

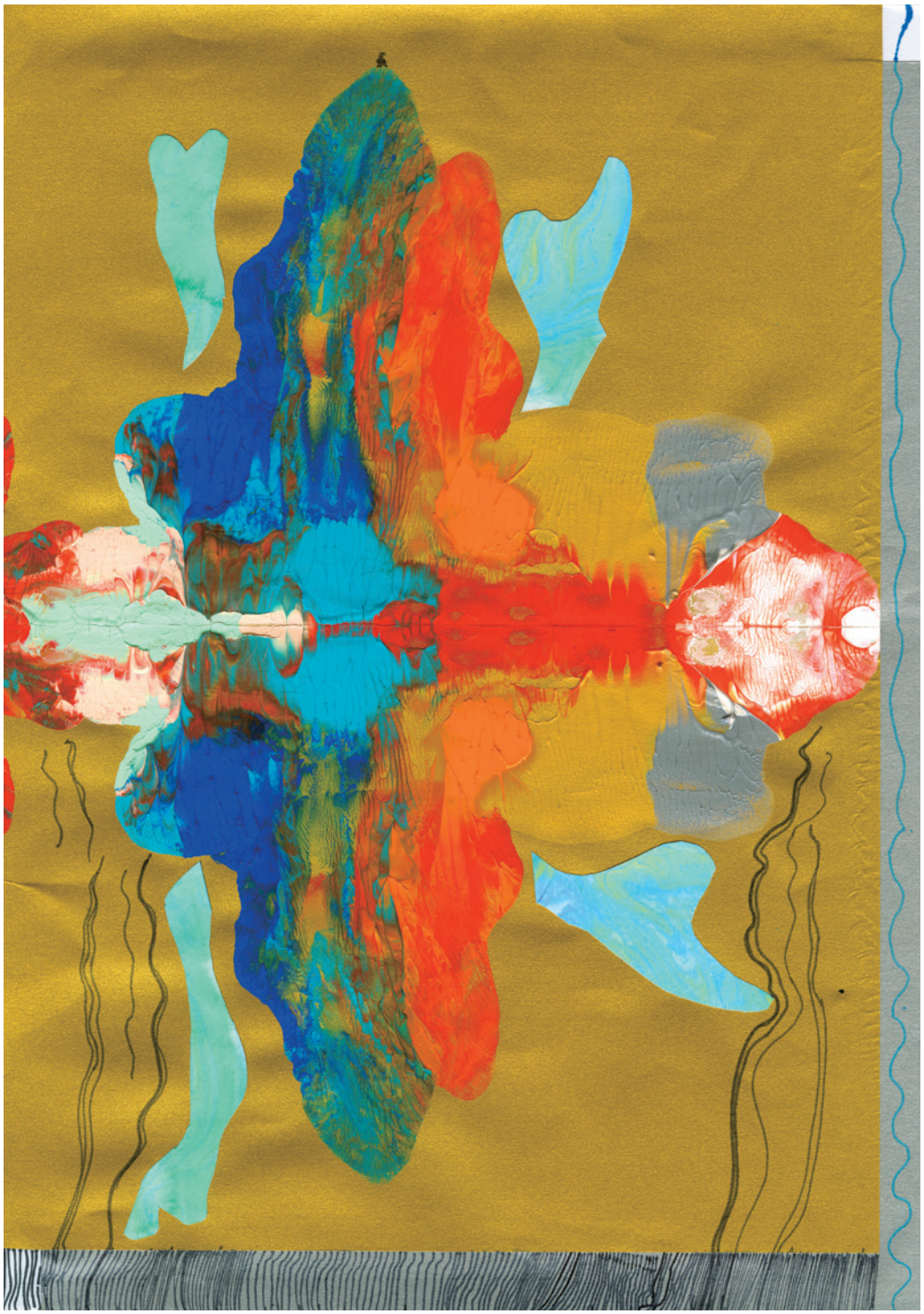
説　　明

そう石先生が学校にやってきて、お話をしています。

審査講評

一目で漱石とわかるほほえましい絵、子供らしい素直さを感じる。

早稲田大学賞



タイトル

「丘の上のトラ」

新宿区立四谷第六小学校　５年　岩﨑　寛和

説　　明

色とりどりの丘の上に、１匹のトラがいる。（小さい点がトラ）丘の下は湖。湖の水面に丘はうつるが、トラはうつらない。

審査講評

とにかく惹きつけられる印象的な作品。

佳作

タイトル　夕焼け

新宿区立早稲田小学校　5年　山本　晴貴

説明

ぼくは、夢の中でとても美しい夕焼けを見ました。あまりに美しかったので起きてすぐ、覚えているうちに絵をかきました。このような美しい自然の景色がいつまでも見られるとよいです。

タイトル　イルカ達と海の中で

新宿区立鶴巻小学校　5年　江波　詩織

説明

これはちょっと前にみたイルカと泳ぐ夢です。工夫したところはメインのイルカです。口がむずかしかったです。体の色を色えんぴつとクレヨンをまぜました。あとラインもがんばりました。何度も書き直しをしました。

佳作

タイトル　かおの星ざ

新宿区立戸塚第二小学校　4年　二口　達成

説明

右のオーロラがあんこくにのまれていて生きのこったオーロラが星になっています。顔の星ざがあります。

タイトル　ワニに食べられるー!!

新宿区立戸塚第二小学校　4年　八田　璃海

説明

どうぶつ園のおりに入ってしまってそれは、ワニのおりだったから食べられそうになった。

佳作

タイトル 虫の目線

新宿区立戸塚第三小学校　4年　岩崎　曜

説明

虫から見ると人はどういうふうに見えるだろう。虫はわたしたちのことをどういうふうに思っているのだろう。ということをひょうげんしてみました。

タイトル むらさきの世界

新宿区立戸塚第三小学校　4年　桐谷　翠音

説明

むらさきのゆめをみて、そらをみ上げると全部むらさき。

佳作

タイトル

地球がもっと冷えたらいいな

新宿区立西新宿小学校　4年　大上　晄

説明

学校で環境について勉強したので、地球温暖化がストップすればいいな、と思って描きました。

タイトル

蝶の群れ

新宿区立西新宿小学校　5年　髙木　幸眞

説明

蝶の群れが、お花畑で大きな蝶を描いている夢が見たい、そんな思いから描きました。

佳作

タイトル　よみがえる草食恐竜と美しい風景

新宿区立西戸山小学校　4年　大川　春樹

説明

肉食恐竜には、食べられずに草食恐竜といい風景が見れたらいいなと思いました。

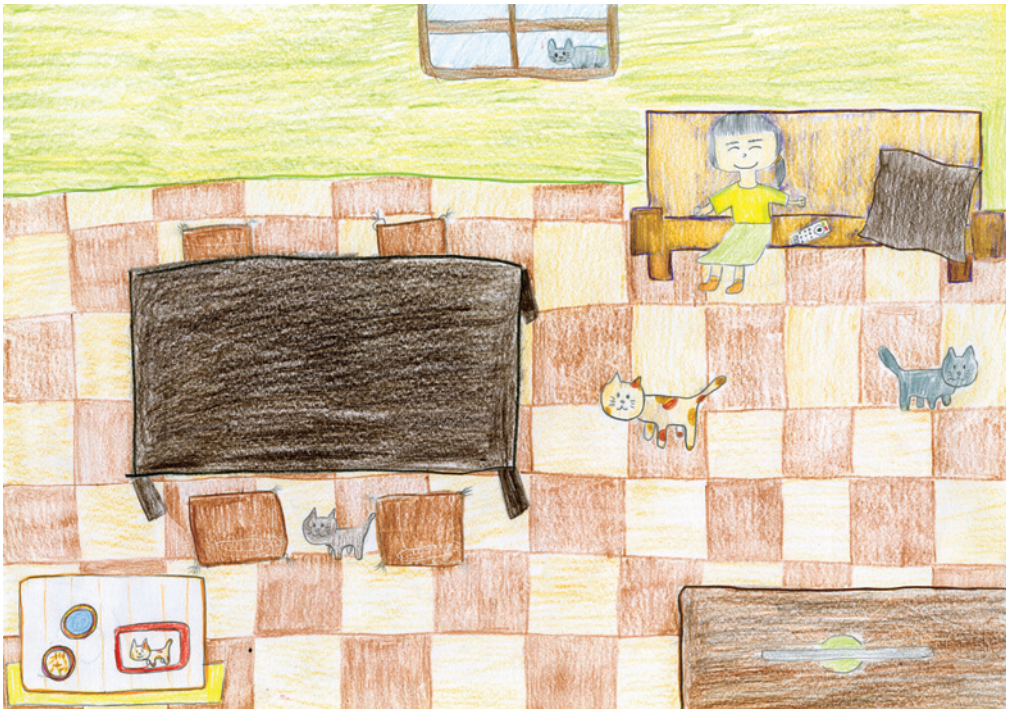
タイトル　ドアの中には…

豊島区立南池袋小学校　5年　竹本　麗

説明

この中（ドアの中）に入ると、今、自分が想像している世界に入れます。私は、みんな楽しめる、選べる、おしゃれができるような、洋服ランドに入りました。ただし、その洋服ランドだけではない。みんなが考えるのです。

佳作



タイトル　ねこがたくさんの家

安芸太田町立戸河内小学校　6年　多賀　心優

説明

私がねこをたくさんかっているところです。わたしは、ねこをかっていますが、もっとかいたいのでこの絵をかきました。工夫したところは、ねこがまどから中をみているところと、ねこをたくさんかいたことです。

タイトル　地球めつぼう

安芸太田町立上殿小学校　6年　影井　永遠

説明

地球に太陽が近づいてきて地球がめつぼうする絵です。

佳作

タイトル

「もしきょうりゅうが生きていたら」

苓北町立富岡小学校　4年　福島　詩

説明

ぼくが好きなきょうりゅうが生きていたら、きょうりゅうといっしょにくらせるのかなと思ったからです。

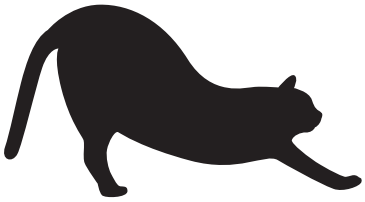
タイトル

鳥の草原

多良木町立黒肥地小学校　6年　岡村　帆斗

説明

自分が好きなたくさんの鳥に囲まれるそんな夢をみたいと思ってかきました。



法人会の理念

法人会は税のオピニオンリーダーとして
企業の発展を支援し
地域の振興に寄与し
国と社会の繁栄に貢献する
経営者の団体である

公益社団法人四谷法人会

◎会員企業のスキルアップと自己啓発を積極的に支援します。

◎税・経営・健康・一般教養に関する研修（簿記講座・申告書作成講座・特別講演会等）を行っています。

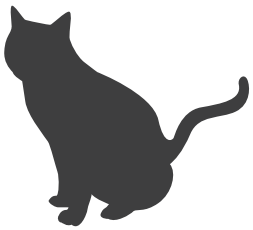
◎新年賀詞交歓会・屋形船・ボウリング等異業種交流により、新しい人・仕事のつながりを生み出します。

◎多くの福利厚生事業（生活習慣病検診・経営者大型保障・ハイパー任意労災・がん保険等）を行っています。

これまで鳥の領域だった空中散歩がドローンの目をとおして、人間が体感できるようになりました。「空の産業革命」です。観光関連事業は、ドローンのバードビューをもっとも活用できる産業分野です。新たな切り口で観光資源の魅力を最大化するお手伝いをさせていただきます。

株式会社 ドローンクリエイション
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 545
TEL●03-6388-9242　URL●www.drone-c.co.jp

新宿の桜をPRする動画
（当社制作 2018年）
一般社団法人 新宿観光振興協会
Youtubeチャンネル
http://drone-c.co.jp/kankopr



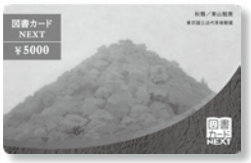
図書カードNEXT

心やすらぐひと時を

東山魁夷 シリーズ

1,000円「夏に入る」

3,000円「緑渓」



5,000円「秋翳」

10,000円「白馬の森」

お祝い、お礼・お返し、ご挨拶に
「本の贈りもの」図書カードNEXT

- 取扱い書店にて額面金額のままでお求めになれます。
- 残額・利用履歴がPC・スマートフォンから確認できます。
- 有効期限は10年。カード裏面に印刷されている有効期限内にご使用ください。

www.toshocard.com　日本図書普及株式会社

ARはじめました！
まずはご相談ください

株式会社 山一印刷
企画・AR / 製版 / 印刷 / 製本 / 配送

RealAR をダウンロードして携帯をかざしてください

RealAR のダウンロード方法はこちら
◆ Android の方 Play Store
◆ iPhone の方 Apple Store
→ realar 検索

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町545
TEL 03(5229)0241　FAX 03(5229)0255

〈主催〉　新宿区・新宿区教育委員会

〈後援〉　東京都教育員会、千代田区、文京区、熊本県、熊本市、阿蘇市、玉名市、松山市、伊豆市、鎌倉市、広島県安芸太田町、早稲田大学、東北大学、朝日新聞社、朝日小学生新聞、朝日中高生新聞、㈱岩波書店、㈱新潮社、㈱紀伊國屋書店、新宿区町会連合会、鎌倉漱石の會、一般社団法人新宿区印刷・製本関連団体協議会、公益財団法人新宿未来創造財団

〈対象〉　読書感想文コンクール　全国の中学生・高校生
絵画コンクール　全国の小学生

〈賞〉　最優秀賞、優秀賞、朝日新聞社賞、紀伊國屋書店賞、新潮社賞、早稲田大学賞、佳作

・本書に掲載した内容の無断転用を禁じます。

・選んだ一行は、原則、応募者本人が応募票に記載したとおり表示しています。したがって原文とは表記が異なる場合があります。

・文中には、今日の観点からみると不当・不適切と考えられる表現がありますが、原文の歴史性・文学性を考慮して、そのままとしました。

・作品集作成にあたり、作品によっては句読点や判読不明文字など付け加えました。

・絵画は実際の作品と色合いが多少異なる場合があります。

・絵画作品のタイトル・説明文は、原則、応募者本人が応募票に記載したとおり表記しています。

この印刷物は業者委託により700部印刷製本しています。その経費として1部あたり1885円（税込）がかかっています。ただし、編集時の人件費や、配送費などは含んでいません。

平成30年度新宿区夏目漱石コンクール作品集
発 行 年 月：平成30年12月
編集・発行：新宿区文化観光産業部文化観光課
〒160-8484　東京都新宿区歌舞伎町1-5-1
TEL 03(5273)4126　FAX 03(3209)1500

印刷物作成番号
2018-42-2801